

調査研究報告書

○学年間・学校種間の連携を図るキャリア教育の実践に関する調査研究（3年次／3年）

教科研修・ICT推進部

指導主事 竹内 悟 …… P 1

○「組織的な学校課題解決に向けた校内研究・校内研修」の推進に関する調査研究
（1年次／2年）

教科研修・ICT推進部

指導主事 加藤 史章 …… P 16

○小・中学校の特別支援学級及び通級指導教室における自立活動に関する研究
（2年次／2年）

- 「小・中学校特別支援学級・通級指導教室における自立活動Q&Aハンドブック」の作成—
- ・（別紙：自立活動Q&Aハンドブック）

特別支援教育部

指導主事 財津 誠一 …… P 30

○「チーム学校」における支援体制づくりに関する調査研究（1年次／2年）
—教育相談コーディネーターを核とした専門スタッフ等の活用を通して—

教育相談部

指導主事 後藤 由美 …… P 35

学年間・学校種間の連携を図るキャリア教育の実践に関する 調査研究（3年次／3年）

大分県教育センター教科研修・ICT推進部

指導主事 竹内 悟

I 研究の背景と目的

小・中・高等学校の学習指導要領総則（平成29年・30年告示）において、初めて全校種にわたって「キャリア教育の充実」が示された。大分県においては、子ども・若者の進路・職業意識の希薄さや社会人・職業人としての基礎的・基本的な資質をめぐる課題等への対応が求められており、大分県長期教育計画（「教育県大分」創造プラン2016）改訂版〈令和2年3月〉に「キャリア教育・職業教育の充実」を明記し、キャリア教育を推進している。

そこで本研究は、3年計画で大分県のキャリア教育について現状を把握するとともに、実践事例を収集及び周知することで、キャリア教育に関する大分県教育センターにおける研修の充実を図り、大分県の更なるキャリア教育の推進に資することを目的とする。

II これまでの調査研究の結果

調査研究の1年次では、キャリアノート及び学級活動・ホームルーム活動についての実態を把握し、今後の課題を明確にするため、アンケート調査を行った。アンケートは、令和4年度に県教育センターで実施した小・中・高等学校の教諭（在職1年目～11年目）対象の研修受講者（n=862）に行った。アンケートの結果から、「キャリア教育について教員側の十分な理解を図ること」と、「キャリア教育に関する具体的な実践事例を収集し周知すること」の2点が課題として挙げられた。

2年次では、令和5年度の当センターのテーマ別研修において「キャリア教育研修—学年間・校種間の連携—」を新設し、令和5年度と令和6年度の2回（延べ81名参加）実施した。受講後の各受講者の研修評価から、キャリア教育の目的や意義及び各教科との結びつきに対する理解など一定の研修効果が得られた。一方で、校種間の連携の在り方やキャリアノートの活用方法等に課題が挙げられた。また、研究協力校4校に依頼し、キャリア教育の実践事例を収集することができた。

III 3年次の調査研究の内容

1 調査方法

1年次、2年次の調査研究結果を受け、本年度は研究協力校4校の生徒を対象に、キャリア教育に関するアンケートを実施し、その結果を分析することで各校の取組の有用性を検討すること、また、学校現場への還流という観点から収集した実践事例の周知を行うために、当センターにおけるキャリア教育に関する研修の充実につなげることを主な内容とした。

1-1 研究協力校4校について

研究協力校4校については、臼杵市立臼杵南小学校（以下、臼杵南小学校）と臼杵市立南中学校（以下、南中学校）を小・中の連携という観点から、大分県立大分豊府中学校（以下、大分豊府中学校）と大分県立大分豊府高等学校（以下、大分豊府高等学校）を中・高の連携という観点から、2年次に引き続き協力を仰いだ。

臼杵南小学校と南中学校は、臼杵市が取り組んでいる「小中一体教育」の連携校として、義務教育

9年間を見通した系統的な教育を目指している。その中で、キャリア教育に関しても小学校と中学校の連携を意識し、教職員一人一人がキャリア教育についての理解を深めながら、合同研修会を実施するなどしてその取組の充実を図っている。なお、この2校については、校区外からの通学が可能な小規模特認校である。特に南中学校では、「将来の夢や目標をもっている」と答える生徒の割合が低いことは学校課題の1つであった。

大分豊府中学校と大分豊府高等学校は、併設型中高一貫教育校であり、中学校と高等学校が同じ教育目標のもと6年間継続した教育を行っている。中高で連携した多様な教育活動を展開する中で外の世界を見る「窓」を作り、「感性」を育むことを目指し、中高6年間で「つくりたい未来」や「進むべき道」を見つけられるようキャリア教育の視点に立った教育活動に取り組んでいる。

1-2 アンケートの実施について

研究協力校4校の児童生徒を対象に「学年間・学校種間の連携を図るキャリア教育の実践に関する調査研究に係る児童(生徒)へのアンケート」をWebアンケートによる回答で、令和6年7月～令和6年12月の期間に、計3回実施した。主に「人間関係形成・社会形成能力」、「自己理解・自己管理能力」、「課題対応能力」、「キャリアプランニング力」の4領域に関連する16の質問項目と「学校独自項目」の2～5つの質問項目で構成し、5件法で実施した(【別添資料】1-1参照)。なお、母数の小さい臼杵南小学校及び南中学校については、「学校独自項目」の中に記述形式の問いを設定し、個の変容を見取るとともに、経年変化を調査した。各学校の対象学年及び学年別人数は表1の通りである。

表1 アンケート対象学年及び学年別人数

学校名	対象学年	学年別人数(人)
臼杵南小学校	4年	12
	5年	8
	6年	8
南中学校	1年	13
	2年	12
	3年	11
大分豊府中学校	1年	120
	2年	120
	3年	120
大分豊府高等学校	1年	240

1-3 アンケートの分析について

各校におけるアンケート1回ごとの単純集計を行い、各回の結果を比較・分析し、学校別の児童、生徒の変容を見取った(【別添資料】1-2参照)。なお、各回の数値比較をするために、3回のアンケート全てに回答した児童生徒のみを抽出し分析を行った。また、令和5年度全国学力・学習状況調査の質問紙回答結果からみられた県全体の課題としても挙げられている「将来の夢や目標をもつことができている」という項目に対する肯定的回答割合にも着目し、数値の変容を見取った。

IV 調査・研究の結果

1 臼杵南小学校の取組

臼杵南小学校では、「キャリア教育推進計画」を作成し、年間のカリキュラムの中にキャリア教育を位置づけている(【別添資料】2参照)。育成を目指す能力(担任の思い)を設定し、これまで実践してきた各種教育活動とキャリア教育とのつながりを整理し、計画的にキャリア教育を進めている。第6学年のカリキュラムでは、特に「米づくり活動」「道徳教育」「環境教育」「卒業プロジェクト」の取組を重点的取組とし、キャリア教育で育成する4つの力を系統的に育成している。

1-1 アンケート結果からみる児童の変容

臼杵南小学校の3回のアンケート結果をみると、学校全体の平均において、各回で多少の増減はあるもののキャリア教育で育成する4つの能力がバランスよく育成されていることがわかる。また、図1に示すように、学校独自項目に

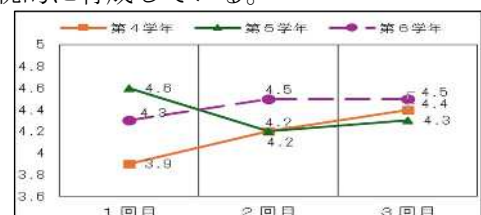


図1 学校独自項目における数値平均

対する数値平均が第5学年、第6学年の児童の回答では、全ての回で4.0ポイントを超えている。第4学年に関しても、数値平均が上昇していることから、米づくり活動などの学校独自の取組が児童の肯定的な変容に結びついていることがわかる。

1-2 アンケートにおける記述形式回答の変容について

回答の変容をみると、1回目では田植えの際の注意点を回答していた児童が、2回目の回答では実際に米づくりを体験する中で感じたことをもとに、育ててくれている地域の方への感謝が大切だと気付いたことがわかる。米づくり活動を通して他者との協働が大切であることを実感できている児童が多くみられた。

2 南中学校の取組

南中学校は、小規模特認校として、キャリア教育の推進を学校の重点的取組の一つに位置づけ、職場体験学習などの学校行事だけでなく、各教科でキャリア教育の視点を意識した授業実践を行っている。学校教育目標の中に「つなげる」というキーワードを入れ、様々な教育活動のつながりを意識するとともに、「自分らしい生き方」をテーマに、生徒、教職員はもとより、保護者や地域と連携を図りながら、授業を含めた中学校での学習活動が生徒一人一人の将来につながるような取組を進めている（【別添資料】3-1、2参照）。

2-1 アンケート結果からみる生徒の変容

南中学校のアンケート結果をみると、キャリア教育で育成する4つの能力のうち「自己理解・自己管理能力」と「課題対応能力」についての項目に対する回答に大きな変容がみられた。図2に示すように、「自分の苦手なことを克服しようと努力している」についての肯定的回答割合は22ポイント増加している。また、「うまくいかなかったとき、その原因を探し、改善しようとする事ができる」についての肯定的回答割合も16ポイント増加している。その要因として「炭活動」が挙げられる。今年度は10月と12月、1月に炭づくりを行っている。炭活動に関する項目についても肯定的回答割合が67→85→95ポイントと段階的に上昇する結果となった。なお、10月の炭活動では、良い炭が思うようにつくれず、生徒は炭活動を通して失敗体験を経験することとなった。そこから炭窯の修理等、炭づくりの方法を改善していき、12月の炭活動では、良い炭を多くつくる事ができた。このように、生徒は試行錯誤する機会が得られる体験活動を通して、「課題対応能力」に必要なレジリエンスを高めていることがわかる。

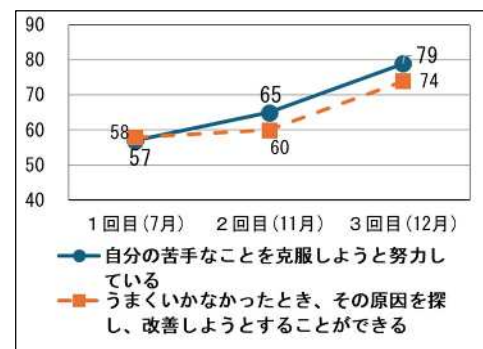


図2 項目別肯定的回答割合の変化

2-2 アンケートにおける記述形式回答の変容について

南中学校の記述回答をみると、2回目の回答以降、1回目よりも他者とのつながりについての回答が増えており、体験活動を通して、他者との協働的な学びが実現していることがわかる。また、学校独自の活動に誇りをもち、取組の有用性を実感している生徒も多いことが記述内容からも判断できる。

3 項目「将来の夢や目標をもつことができている」に対する回答変容について

臼杵南小学校と南中学校における「将来の夢や目標をもつことができている」の項目についてのアンケート結果（肯定的回答割合）は表2の通りである。臼杵南小学校の数値変容をみると、全ての回で70ポイントを超えており、特に、第6学年では、2回目と3回目の肯定的回答割合が高く、数値が上昇した児童については、学校独自項目の「米づくり活動にすすんで取り組んでいる」に対する数値も併せて上昇している。次に、南中学校の数値変容をみると、学校全体では16ポイント上昇して

いることがわかる。また、数値が上昇した生徒については、ゲストティーチャーの取組に関する項目や炭活動に関する項目に対する回答もそれぞれ上昇していることから、南中学校の取組が生徒の自己肯定感の向上に結び付いていることが推察される。なお、臼杵南小学校及び南中学校の臼杵市基礎基本テスト児童生徒質問紙の項目「将来の夢や目標を持っている」の令和3年度からの数値変容を図3に示す。同項目に対する肯定的回答の割合は、南中学校において段階的に上昇していることがわかる。このように、この2校では、長期的な生徒の変容を見取りながら取組の改善に努め、キャリア教育の充実を図っている。

4 大分豊府中学校・大分豊府高等学校の取組

中学校・高等学校が連携し、「高校生サポーター」「中高パネルディスカッション」を学級活動の時間を使ってそれぞれ年2、3回ずつ実施している。「高校生サポーター」は、高校生が中学生の各教室に出向き、学習だけでなく将来の夢や進路選択、この先の高校生活についてなどを座談会の形式で中学生と交流する取組である。「中高パネルディスカッション」は、進路実現をテーマに、高校生が中学生からの質問に答えながら将来について共に考える取組を行っている。

中学校の取組としては、自己の成長を振り返ることができるポートフォリオの作成や生徒会活動と連動した「my way project」(なりたい自分の実現に向けた長・短期目標の設定と自己評価)に取り組んでいる。さらに、休日特別講座「大分花園中学校」では、会の運営は生徒が行い、他学年と共に課題解決に向けた学びを展開している。個々の興味関心によって様々な専門分野について学べるだけでなく、学ぶことの楽しさを味わえることに加え、多様な人材との出会いによって職業観や将来の生き方についても視野を広げられる機会となっている(【別添資料】4参照)。

4-1 アンケート結果からみる生徒の変容

アンケートの数値に関しては全学年とも安定して高い数値を保っていることがわかった。年間、学年、学校種間のつながりを意識したキャリア教育の推進に加え、中学校受験を経て入学してきた生徒たちの多くが、日々自らの学びに対する達成感を味わえていることも背景にあると考えられる。項目の「将来の夢や目標をもつことができている」に対する肯定的回答が約70ポイント、「いろいろな仕事(職業)についても知りたいと思っている」の肯定的回答が約80ポイントであることから見ても、様々な教育活動の中で、自らの学びや成長、新たな目標の設定が位置付けられていることで、自己のキャリアプランニング力を育てていることが伺える。また、アンケート結果の人間関係形成・社会形成能力の全体の数値平均が4.2ポイントと高くなっていることから、生徒の自主性や交流を意識した教育活動が日々位置づけられているといえる。

5 学年間・学校種間の連携の在り方について

学年間の連携では、学年末に1年間の学びを振り返る活動が重要となる。南中学校では、総合的な学習の時間や各教科等での学びを振り返る活動を特別活動の時間に行っている。主に、総合的な学習の時間での実践を通じた学びを蓄積している学校独自のキャリアノートをもとに1年間を振り返り、さらに県版のキャリアノートを用いて振り返りを行う。生徒自身が1年間の学びを振り返るととも

表2 「将来の夢や目標をもつことができている」に対する肯定的回答割合

学校名	1回目	2回目	3回目
臼杵南小学校	77	73	76
南中学校	48	50	64

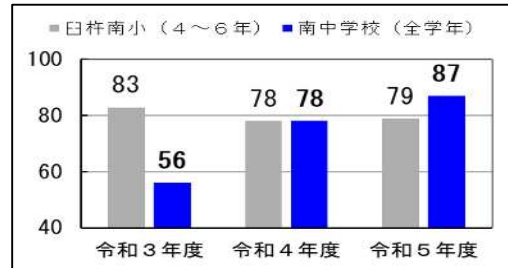


図3 項目「将来の夢や目標をもつことができている」に対する経年変化

に、その学びを次の学年へと円滑につなぐことができる活動となっている（【別添資料】5参照）。

学校種間の連携については、研究協力校4校において、校種間でのキャリアノートの円滑な引継ぎが行われている。さらに、臼杵南小学校と南中学校では、夏季合同研修会を実施し、教職員間での情報交換や情報共有を行うことを通して連携を進めている。また、大分豊府中学校と大分豊府高等学校では、中学生は高校生をロールモデルとしてキャリアを形成し、高校生は中学生と交流することで、自分の目標を再確認できるよう、中高一貫校ならではの特徴を活かした連携を進めている。

6 実践事例の還元及びセンターにおける研修の充実について

本調査研究において、研究協力校4校のキャリア教育に関する実践事例を多く収集することができた。これらの実践及び実践を通しての児童生徒の成長の姿を、本教育センターにおけるキャリア教育に関する研修の中で取り上げることで、実践事例の還元だけでなく受講者にキャリア教育の具体イメージを持たせることができると考えられる。さらに、キャリアノートを活用した振り返り活動の事例を取り上げることで、児童生徒一人一人の学びの足跡を蓄積していくことの意義や学年間・学校種間でのキャリアノートの引継ぎを意識できるような手立ても講じていきたい。

V 調査研究のまとめ

3年計画で行ってきた本テーマにおける調査研究であるが、1年次ではキャリア教育に関する実態調査を実施し、県内のキャリア教育の現状を把握することで、今後の課題を明確にすることができた。2年次では、1年次に挙げられた課題を改善するために、研究協力校4校を選定し、実践事例を多く収集することができた。また、当センターの研修においてキャリア教育研修を新設し、キャリア教育についての理解を図るための研修を行うことができた。3年次である本年度の調査研究では、研究協力校4校の児童生徒の変容を見取り各校のキャリア教育の取組の有用性を検証することができた。

図4は、令和5年度及び令和6年度の全国学力・学習状況調査の児童生徒質問紙において、「将来の夢や目標を持っている」と肯定的に回答した児童生徒の割合である。全国的にも課題として挙げられている同項目であるが、大分県においても令和5年度では、小学校、中学校ともに全国値を下回っていた。しかし、令和6年度の数値をみると、小学校、中学校ともに全国値を上回る結果となっており、改善傾向にあることがわかる。県内各校で取り組まれているキャリア教育が、これらの結果に結び付いていると推察できる。3年間の調査研究で得られた成果をもとに、当センターにおける研修の充実を図り、大分県のキャリア教育の更なる推進につなげていきたい。

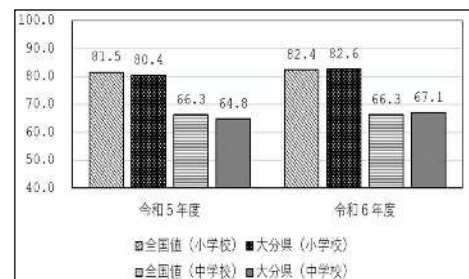


図4 全国学力・学習状況調査質問紙の項目「将来の夢や目標を持っている」の肯定的回答値

VI 参考文献等

- ・中央教育審議会「今後の学校におけるキャリア・職業在り方について（答申）」平成23年1月
- ・国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センター「キャリア教育に関する総合的研究 第一次報告書」令和2年3月
- ・国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センター「キャリア教育に関する総合的研究 第二次報告書」令和3年10月
- ・大分県教育庁義務教育課「教育課程編成・実施状況調査」令和5年12月

【はじめに】

キャリア教育で育成する基礎的・汎用的能力①～④を以下にまとめる。

【キャリア教育で育成する基礎的・汎用的能力】
①「人間関係形成・社会形成能力」

多様な他者の考えや立場を理解し、相手の意見を聴いて自分の考えを正確に伝えることができるとともに、自分の置かれている状況を受け止め、役割を果たしつつ他者と協力・協働して社会に参画し、今後の社会を積極的に形成することができる力

〈例〉 他者の個性を理解する力、他者に働きかける力、コミュニケーション・スキル、チームワーク、リーダーシップなど

②「自己理解・自己管理能力」

自分が「できること」「意義を感じること」「したいこと」について、社会との相互関係を保ちつつ、今後の自分自身の可能性を含めた肯定的な理解に基づき主体的に行動すると同時に、自らの思考や感情を律し、かつ、今後の成長のために進んで学ぼうとする力

〈例〉 自己の役割の理解、前向きに考える力、自己の動機付け、忍耐力、ストレスマネジメント、主体的行動など

③「課題対応能力」

仕事をする上での様々な課題を発見・分析し、適切な計画を立ててその課題を処理し、解決することができる力

〈例〉 情報の理解・選択・処理等、本質の理解、原因の追究、課題発見、計画立案、実行力、評価・改善など

④「キャリアプランニング能力」

「働くこと」の意義を理解し、自らが果たすべき様々な立場や役割との関連を踏まえて「働くこと」を位置付け、多様な生き方に関する様々な情報を適切に取捨選択・活用しながら、自ら主体的に判断してキャリアを形成していく力

〈例〉 学ぶこと・働くことの意義や役割の理解、多様性の理解、将来設計、選択、行動と改善など

【別添資料 1 - 1】
【アンケート項目】

(1) 「人間関係形成・社会形成能力」に関する項目

- ① まわりの人に自分からあいさつすることができる
- ② ほかに人と協力して、いろいろな活動に取り組むことができる
- ③ 当番や係の仕事をお忘れずに取り組むことができる
- ④ 困っている人がいたら、すすんで助けることができる

(2) 「自己理解・自己管理能力」に関する項目

- ① 自分の良いところについて理解している
- ② 自分の良いところを伸ばそうと努力している
- ③ 自分の苦手なことについて理解している
- ④ 自分の苦手なことを克服しようと努力している
- ⑤ 将来の夢や目標をもつことができている

【回答選択肢（5件法）】

- 5 とてもあてはまる
- 4 ややあてはまる
- 3 どちらともいえない
- 2 あまりあてはまらない
- 1 まったくあてはまらない

【実施期間】

- 1回目 7月～8月
- 2回目 10月～11月
- 3回目 12月～1月

【別添資料】 学年間・学校種間の連携を図るキャリア教育の実践に関する調査研究

(3) 「課題対応能力」に関する項目

- ① ほかに人とちがう意見でも、自分の意見を伝えることができる
- ② 失敗してもあきらめずにがんばることができる
- ③ うまくいかなかったとき、その原因を探し、改善しようとするすることができる

(4) 「キャリアプランニング能力」に関する項目

- ① 将来のために勉強することは大切だと考えている
- ② 見通しをもって、やるべきことに取り組むことができる
- ③ わからないことは、先生や友だちに聞くことができる
- ④ いろいろな仕事（職業）について知りたいと思っている

(5) 学校独自項目

[4校共通項目]

- ① 学校の授業（各教科の授業）は楽しい
- ② 学校の授業（各教科の授業）の内容は分かる

[臼杵南小学校項目]

- ③ 米づくり活動にすすんで取り組んでいる
- ④ 米づくり活動を通して、大切だと思うことやよかったと思うことを教えてください（記述）

[南中学校項目]

- ③ ゲストティーチャーを招いての活動が、自分の将来について考える良い機会となっている
- ④ 炭活動にすすんで取り組んでいる
- ⑤ 炭活動を通して、大切だと思うことやよかったと思うことを教えてください（記述）

【別添資料 1-2】

【アンケート結果】 ※報告書に記載しているデータは省略、その他報告書の記載に関わる部分のみ抜粋

○各校における1回目と3回目の数値比較

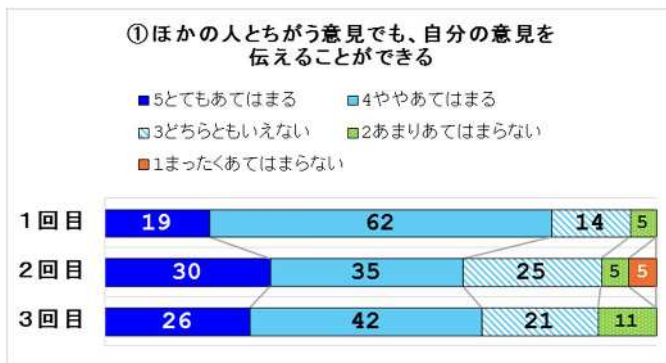
学校名 (対象)	実施回	各項目の数値平均				
		(1)	(2)	(3)	(4)	(5)
臼杵南小 (全体)	1回目	4.3	4.2	4.2	4.3	4.3
	3回目	4.3	4.2	4.1	4.2	4.4
南中 (全体)	1回目	4.0	3.7	3.6	4.0	4.0
	3回目	3.9	3.9	4.2	4.0	4.0
大分豊府中 (全体)	1回目	4.4	4.0	4.2	4.2	4.2
	3回目	4.2	3.9	4.0	4.1	4.1
大分豊府高 (全体)	1回目	4.3	3.9	4.0	4.1	3.8
	3回目	4.2	4.0	4.0	4.1	3.9

※表中の項目(1)～(5)は、【別添資料1-1】で示してあるアンケート項目の(1)～(5)に対応

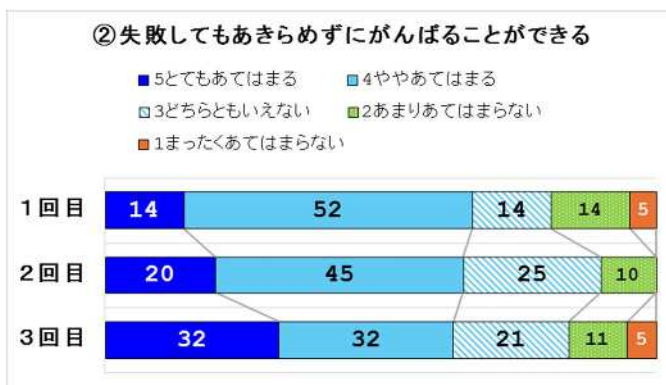
表に示すように、特に南中学校における「課題対応能力に関する項目」に対する数値平均が上昇する結果となっている。

【別添資料】 学年間・学校種間の連携を図るキャリア教育の実践に関する調査研究

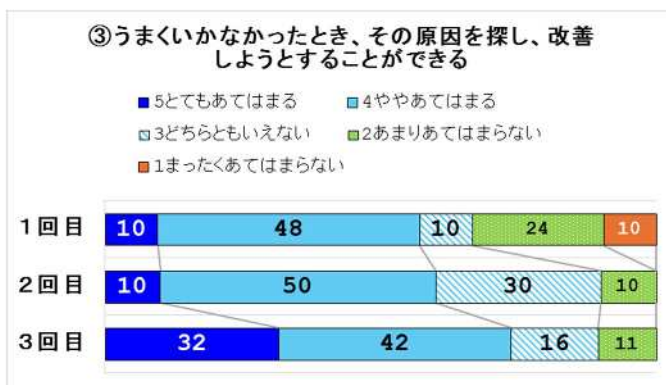
○南中学校（全体）における「課題対応能力」に関する項目に対する回答割合の変化



②、③の質問項目に対して、肯定的回答のうち、「5とてもあてはまる」の回答割合が増加しており、自分の考えを明確にし、自信をもって回答する生徒が増えていることが推察できる。



③の項目に関しては、3回目の回答結果に大きな変化が見られる。2回目と3回目のアンケート実施の間に、今年度2回目の炭活動が実施された。1回目の炭活動での失敗を生かし、2回目の活動ではよい炭をつくることができたという成功体験ができたことが要因だと考えられる。



★生徒は試行錯誤する機会が得られる体験活動を通して、「課題対応能力」に必要なレジリエンスを高めていることがわかる。

○記述式回答の変容（※同様の内容はまとめて表記している）

【臼杵南小学校】

質問項目「米づくり活動を通して、大切だと思うことやよかったと思うことを教えてください」

1回目の主な記述内容	2回目の主な記述内容	3回目の主な記述内容
<ul style="list-style-type: none"> ・土に空気を入れることやしっかり植えること（14） ・みんなで協力すること（4） ・地域の人との交流（3） ・お米を大切にすること（2） ・家では出来ない事が出来て楽しい ・南っ子祭りで使うから 	<ul style="list-style-type: none"> ・土に空気を入れることや、稲が倒れないようにすること（6） ・みんなで協力したり、他の学年との仲を深めること（6） ・愛情をこめて植えること（3） ・お米を大切にすること（3） ・地域の人への感謝、人とのつながり（2） ・達成感がある ・おいしいお米をつくと気持ちがいい 	<ul style="list-style-type: none"> ・全校で協力してお米をつくること（6） ・丁寧に作業すること（5） ・土に空気を入れることや、水回りの管理（5） ・お米を大切にすること（3） ・お米がたくさんできてうれしい（3） ・いつも体験できない事ができたこと

【別添資料】学年間・学校種間の連携を図るキャリア教育の実践に関する調査研究

【南中学校】

質問項目「炭活動を通して、大切だと思うことやよかったと思うことを教えてください」

1 回目の主な記述内容	2 回目の主な記述内容	3 回目の主な記述内容
<ul style="list-style-type: none"> ・全校で協力したり、まわりの人と協力したりすること（5） ・炭の作り方や使われ方を知ることができる（4） ・自分から進んで活動に取り組むこと ・炭を売ったらお金になること ・全力で取り組むこと 	<ul style="list-style-type: none"> ・みんなで協力していいものをつくらうとすること（まわりとの協力）（11） ・きびきびと行動すること ・自分から行動すること 	<ul style="list-style-type: none"> ・いろんな人と協力して一緒に活動すること（まわりとの協力）（5） ・他学年や先生方とのつながりができる（2） ・全校での活動は他の学校ではできないと思うので良い

○大分豊府中学校・大分豊府高等学校における、項目（2）⑤「将来の夢や目標をもつことができている」、（4）④「いろいろな仕事（職業）について知りたいと思っている」についての肯定的回答割合の推移

【大分豊府中学校】

項目	実施回		
	1 回目	2 回目	3 回目
(2) ⑤	67	60	66
(4) ④	78	76	77

【大分豊府高等学校】

項目	実施回		
	1 回目	2 回目	3 回目
(2) ⑤	61	74	71
(4) ④	83	73	81

★様々な教育活動の中で、自らの学びや成長、新たな目標の設定が位置付けられていることで、自己のキャリアプランニング力を育てていることが伺える。

【別添資料 2】

臼杵南小学校のキャリア教育全体計画

キャリア教育推進計画
学校全体目標 将来の夢や希望を持ち、自己実現を目指す態度の育成

育成を目指す資質能力(担任の思い)
 ◆思い1 (人間関係形成・社会形成能力) 友だちの考えや立場を認め、目的に向かって高め合う仲間になってほしい。
 ◆思い2 (自己理解・自己管理能力) 自分の仕事や活動に責任や見通しを持って最後まで取り組んでほしい。
 ◆思い3 (課題対応能力) 社会に関心を持ち情報を集め、主体的に問題解決に向かう力をつけてほしい。
 ◆思い4 (キャリアプランニング能力) 実社会の様々な仕事を知り、働くことの大切さ、やりがい、苦力を理解してほしい。

基本姿勢
 ◆基本姿勢1 全教科・領域を通じた育成
 ◆基本姿勢2 体験的な活動の取組
 ◆基本姿勢3 地域リソースとの連携
 ◆基本姿勢4 発達段階に応じた取組

教育活動の具体
 4つの重点的取組
 I 道徳教育
 II 米づくり活動
 III 環境教育
 IV 卒業プロジェクト

小規模特選校
 少人数の強みを生かした個別最適な学び
 縦割り班と(縦軸)と地域連携(横軸)で
 きめ細かな教育支援と個別最適な学びを実現

Strength
 キャリア教育推進に
 おける南小の強み

小中一体教育
 中学校キャリア教育との接続
 公開授業の相互参加やキャリアアノートの活用で
 次のステージへの確かなキャリアパスを形成

・臼杵南小学校の実態に合わせ、育成したい力を自分たちの言葉でわかりやすく示している。

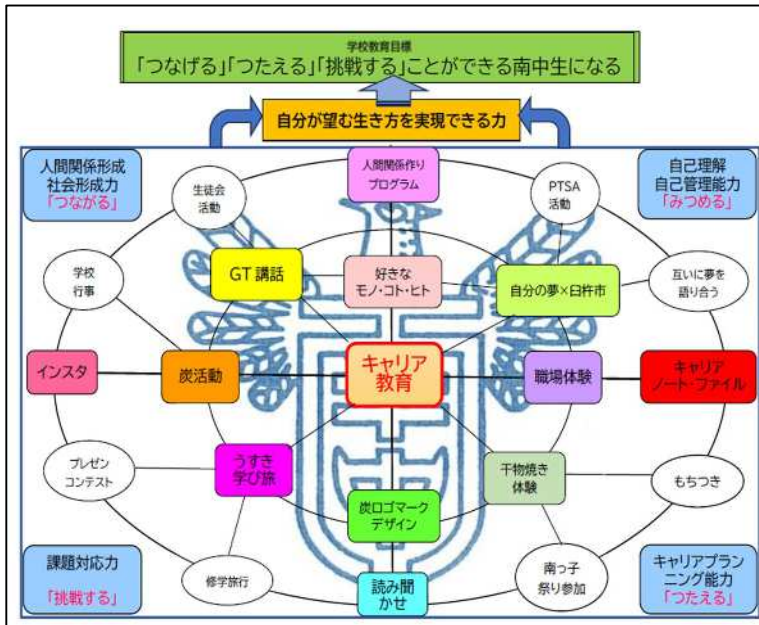


★児童、教職員と共有できるような具体的なでわかりやすい内容にしている。
 ★「重点的取組」を設定し、カリキュラムに位置づけることで取り組みやすい。
 ★カリキュラム・マネジメントの促進がされている。

【別添資料】 学年間・学校種間の連携を図るキャリア教育の実践に関する調査研究

【別添資料 3-1】

南中学校キャリア教育構想図



南中学校では、生徒が勤労観や職業観をもち、社会的に自立できる力を「自分が望む生き方を実現できる力」とし、この力の育成に向けキャリア教育構想図を作成している。



★つながりを可視化することで、生徒と教職員が共通した認識を持ちやすくなり、取組内容と育成する力との関連が明確になる。

【別添資料 3-2】

各教科とキャリア教育の結びつき（南中学校キャリアファイルから抜粋）

～自分が望む生き方を実現していける力～

	人間関係形成能力・ 社会形成能力	自己理解・ 自己管理能力	課題対応能力	キャリアプラン ニング能力
	つながる	みつめる	挑戦する	きめる (つたえる)
国語	話し合いやスピーチ等で相手の考えや立場を理解しながら聞く。 話し合いやスピーチ等で相手を尊重しながら自分の意見を伝える	自分の経験と結び付けながら文章を読む。 ワークや漢字など、必要に応じて復習する。	話し合いのテーマや作文の課題を決定する。 根拠に明確にして、話したり書いたりする。	目的に応じて様々な資料から適切な情報を取捨選択する。 他の人の意見を聞いたり本や文章を読んだりして、自分の考えを深める。
社会	現代社会の課題とその解決策について話し合う。	さまざまな視点から歴史をとらえる。	資料を読み取り、自分のことばでまとめる。	社会生活のさまざまなしくみについて理解し、身近な生活や自分の将来と結び付けて考える。
数学	友達の考えと比較し、自分の考えを修正したり、深めたり努力する。	自分の得意・不得意を理解し、学習内容の定義が通むよう努力する。	既習事項を活用して、新しい課題の解決に向けて粘り強く取り組む。	自分が考えたことを数学用語を使って相手にわかるように説明する。
理科	班員で協力して、班で観察・実験を行う。	物質や自然に関する事象・現象について自ら進んで学ぼうとする。	自然の事象・現象に疑問をもち、課題を設定し、計画を立てて解決する。	理科で学んだことや科学的な考え方をその後の学習や実生活に生かす。
英語	「まとまりのある英語を聞いて、真意や要点を適切に理解する。 「聴いたり読んだりしたことについて、聴いたり読んだりした内容を話し合ったりする。 ・目的や場面、状況などに合わせてコミュニケーションを図る。	・興味や依頼などを聞いて適切に応じる。 ・伝言や手紙などの文章から書き手の意向を理解し、適切に応じる。	・聴いたり読んだりしたことなどについて、情報をまとめる。 ・自分の伝えたい内容を相手に伝える。 ・伝えたい内容をまとめる。 ・伝えたい内容をまとめる。 ・伝えたい内容をまとめる。	・聴いたり読んだりしたことなどについて、自分の考えや気持ちなどを話し合ったりする。
音楽	・音楽年と共に表現を工夫しながら合唱をつくりあげる。 ・音楽の特徴を文化、歴史や他の芸術と関連付けて鑑賞する。	自分や仲間との表現方法を学び、より豊かな合唱となるよう工夫する。	歌詞の内容や曲想を味わい、表現したい思いや意図をもって音楽をつくりあげる。	我が国や諸外国の音楽の特徴から、音楽の多様性を理解して鑑賞する。
美術	相手や自分の思いをおしはかり、相手の良い面に気づくようになる。	社会の情勢や情報をキャッチし、必要なものを取り入れ、自分の考えを表現したりして伝える。	課題に向き合う中で主題に迫るための効果的な表現方法を探る。	製作におけるコンセプトやお互いの思いや考えを知るとともに自分の思いをまとめて伝える。
保健	話し合い活動等を通して相手の意見や違いを尊重する。	自らの課題を見つけ、安全面に留意しながら取り組む。	できないことや分からないことに対して積極的に質問したり、他者と取り組む。	学んだことを普段の生活で実践し、自分や他者と健康を目指す。
技・家	製作や実習等を通して失敗や成功を繰り返しながらクラスの仲間と交流し、信頼を深めていく。	学習や製作を通してその楽しさや完成の喜び、充実感や達成感を味わう。	学習に対して疑問に思ったことや分からないことは積極的に質問したり、自分で調べて理解を深める。	既習したものを実生活の中で実践し、家庭や社会の一員として自立を目指す。

・各教科とキャリア教育で育成する基礎的・汎用的能力がどのように結びついているのかを生徒に示し、共有している。

(例) 国語科

「話し合いやスピーチ等で相手を尊重しながら自分の意見を伝える」

(人間関係形成・社会形成能力)



★それぞれの教科の中にすでにあるキャリア教育の要素（キャリアの断片）を見いだすことが大切（2014 筑波大学・藤田）。生徒が学ぶことと将来のつながりを見通せるものになっている。

【別添資料】 学年間・学校種間の連携を図るキャリア教育の実践に関する調査研究

【別添資料 4】

【大分豊府中学校の取組】

○ポートフォリオ

●自分が2学期間、特に頑張ったこと

第1位(Iris)
具体的に例をあげましょう。
Irisの合唱を頑張りました。リーダーという立場と伴奏者という2つの立場をするのは難しく大変でした。けれど、周りの人に助けをもらいながらやりとげることができました。

第2位(体育祭)
具体的に例をあげましょう。
実行委員としても3年生としても最初は課題だらけでしたが、話し合いを繰り返して各クラスや学年としての団結力が高まりました。

【評価基準：A(大変良い)・B(よい)・C(努力が必要)・D(大いに努力が必要)】

●係(委員会)の取り組み満足度 【A・B・C・D】
(評議) 係・委員会
理由 後期は呼びかけを少なくすることを目標にしていて、その目標を達成できています。クラスも自分で時計を見て行動する人が増えてきているから。

自分の学級目標達成度を書いてください。

●学級目標の達成度 【A・B・C・D】
理由 前はできなかったおんなげ苦勞をして何かをする「苦勞の功」ができたから。

2学期で特にできたこと(1)を挙げましょう。(複数可、最大3個まで)

安全に気を付け落ち着いた生活ができる	進んで新しい考え方や方法を見つけ、自らの個性をいかした生活を工夫する	
時間を守って行動する	思いやりや感謝の気持ちを持って行動する	○
身だしなみに気をつける	思いやりで共に協力し、よりよく生きていこうとする	
道や相手にふさわしい挨拶や言葉づかいをする	進んで自然を愛護し、自然の生命を尊重する	
忘れ物がなく、提出物の期限を守る	進んで清掃やボランティア活動をする	○
自身の健康の保持増進と体力の向上に努めている	正と不正を明確め、公正・公平な態度をとる	
自ら進んで目標の実現に向け、頑張強く努力する	ルールやマナーを大切にすると共に公共のために役立つことを進んで行う	○
自分の役割を自覚し、最後までやり遂げる		○

3.【もう少し改善していきたいところ】
根拠強く努力することを改善したい。3学期は何かの卒業まで続けることを目標にする!!

- ・「学期で自分が頑張ったことについて記述する」等、項目で学期を振り返る。
- ・A・B・C・Dの4段階で自己評価する。
- ・学級目標も振り返りをさせる。

〈同じ生徒の1学期末の振り返り〉
「“だいすけ”の“だ”があまりできず、行動が全体的に遅かったので、次は何があるかを考えてすばやく行動できるようにする。」



- ★この生徒は1学期できてなかった目標が2学期は達成できたと自己評価している。
- ★振り返らせたポイントを明確にし、次学期の見通しを持たせている。
- ★ポートフォリオは、最後はキャリアノート(またはキャリアファイル)にためていき、これまでの自分を振り返ることができるよう足跡を残していく。

Omy way project

【目的】 スケジュール管理能力を培い、自分で目標を立てて継続する力を養う。

【内容】 生徒会による新たな取組として本年度後期より開始した。

将来なりたい職業やなりたい自分などの長期的な目標と、今月継続して実施したい短期的な目標を記述し、スケジュールを立てる。

11 2023 NOVEMBER

SUN	MON	TUE	WED	THU	FRI	SAT
	30	31	1	2	3	4
5	6	7	8	9	10	11
12	13	14	15	16	17	18
19	20	21	22	23	24	25
26	27	28	29	30		

- ・この生徒は「計画性のある大人」を将来の目標とし、そのためには今月は「毎日目標(予定)をたてて行動すること」を目標とした。



- ★将来の夢、目標に向けてスモールステップで達成できそうな短期目標を立てることで自己管理能力の育成をめざす。
→書かせっぱなし、立てさせっぱなしにさせないように注意している。

【別添資料】学年間・学校種間の連携を図るキャリア教育の実践に関する調査研究

○休日特別講座「大分花園中学校」

【目的】自分で考え、自分で学ぶという自分で行動できるたくましさを育成する。

【内容】大学や一般企業を招き特別講座を年5回実施する。生徒は興味のある講座を自由に選択でき、保護者も参観することができる。

〈生徒への願い〉

Starting Point 学びの起点を。

人工知能をはじめとする科学技術の発展に加え、気候の変動や人々の価値観の多様化など、さまざまな要因が複雑にからみ合うことで、社会が激しく変わり続ける新時代となりました。

このような時代の中では、変化に自分たちを合わせていくような「柔らかさ」だけでなく、「つくりたい未来」を描き、自分たちで変化を創り出していく「たくましさ」、つまり、自分で考え、自分で行動できる「たくましさ」が必要となります。

また、新時代を生きる生徒のみならずには、1人で閉じてしまうのではなく、他者や外界とのかかわりの中で、ウェルビーイングを求め続ける姿勢も必要となります。

そして、学校にとって、多忙な先生方の時間的余裕を基盤としたウェルビーイングの向上への対策も大切です。

これらの想いを形にした取組が、休日の特別講座、大分花園中学校です。

大分花園中学校で、大学の先生や企業の方が講師となり、専門的な内容について、実技や実践や対話を交え、1人では学べない学び、より楽しくおもしろい学びを展開します。

この「楽しい、おもしろい」という思いが起点となり、「もっと学びたい」や「他のことも学んでみたい」という考えを生み、「自分で学ぶ」という行動を生む。さらには、自分の将来を含め、みなさんが「つくりたい未来」を描き、行動していく――

大分花園中学校での学びが、自分で考え、自分で行動できる「たくましさ」の起点となることを期待しています。

1

〈講座・例〉

光るスーパーボール、スライム燃料電池を作成してみよう ーケールのナノ化学ー	崇城大学
誰が味方が！微生物を知って何になる？	崇城大学
ピンチの時の英会話	大分大学
導入編 計算機システムとその応用について	大分大学
ホームワイドで買える材料と工具でお湯で動く機械 「低温差スタースターリングエンジン」を作った	大分大学
プログラミングなどのソフト開発が、社会問題解決 できること	株式会社 オーイジー
産物・インテリアの観点から災害時に必要な仮設構造 （防災ベッドやグランピング）について学ぶ	日本文理大学

〈生徒の生活ノートより〉

・花園中学校に参加しました。新鮮な気持ちでした。私は英会話とプログラミングを学びました。どちらも今後の将来に役立つことでした。学んだことを基に自分の将来について考えていきたいです。

〈受講後の生徒の感想〉

- ・何事もやってみなくてはわからないことを経験させてくれる講座だった。
- ・自分が普段触れない分野の楽しさや考え方、知識に触れて、物の見方が増えた。経験することで自分に落とし込めた。教科書にない勉強の大切さがわかった。



★将来に向けて自分と向き合う活動、学びと将来をつなげる活動が展開されている。
興味・関心に基づく勤労観や職業観の形成、自分の生き方の探索、自己理解につながっていく。

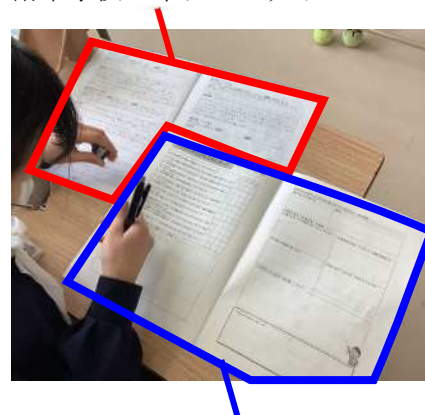
【別添資料 5】

南中学校の学年末の実践（1年間の振り返り）

南中学校キャリアファイル
振り返りシート



南中学校キャリアファイル



大分県版キャリアノート

学年末の特別活動の時間に1年間の振り返りを行っている。生徒はまず南中学校キャリアファイルを見返しながら各教科や総合的な学習の時間等で実践してきた取組を振り返る。その後、大分県版のキャリアファイルに振り返った内容を記入している。



★学びの足跡を蓄積し、次年度へとつなぐことができる。

【別添資料】学年間・学校種間の連携を図るキャリア教育の実践に関する調査研究

南中学校キャリアノート

〈Bさんの小学6年時〉

〈Bさんの中学3年時〉

6年生のわたし
記入日 〇月 〇日 〇曜日

♪わたしってこんな人です♪

①自分の長所
寝る

②好きなこと・夢中になっていること
韓国ドラマを見る

③しよう来の夢・目標
ドルフントレーナー

④最高学年になってがんばること
授業におもしろい

⑤今年で小学校生活は最後です。なりたい自分についてまとめてみよう。
遊ぶ時間短くて、勉強時間長くて、勉強している。おかげが早い人になりたいです

自分の課題はどこ？

【大人からのメッセージ】



中学校3年生の私
記入日 〇月 〇日 〇曜日

〇今の自分を見つめて
今の自分(自分の好きなこと・もの、得意なこと・もの、頑張っていることなど)
私の自己PR(自分のよいところ)
こんな大人になりたい(将来の夢)
〇なりたい自分になるために身に付けたいこと(目標)と、そのために取り組みたいこと

学習の目標
生活の目標
家庭・地域での目標
その他(面白い事・資格取得など)の目標

そのために
そのために
そのために
そのために

【大人からのメッセージ】
このままじゃいけないから早く勉強して早く卒業して早く社会生活を送ってほしい。

★1冊のノートでこれまでの自分の足跡を見ることができるので、自分の成長を感じることができる。現中学3年生は5年生から書き始めているので、5年間の記録を1冊の中で見ることができる。

★「目標達成のために取り組むこと」では、より具体的に書くことができるようになっていく。

★Bさんは小学生の頃から同じ夢を持ち続けている。
中学3年生では、「今の自分を見つめて」という項目で、自分自身をしっかり分析できている。

【その他の実践紹介③】

南中学校の炭活動



原木の切り出し作業



窯への立て込み作業



炭の袋詰め作業



飾り炭づくり



干物焼き体験

・地域の方々と協働しながら行う南中学校の伝統行事。よりよい炭を作るにはどうすれば良いか、学年があがる毎に工夫が見られる。作った炭は保護者や地域に向けて重さを変えて袋詰めしたものを販売したり、季節に合わせた飾り炭に加工して販売したりしている。また、地元の高校生が作った魚の干物を自分たちで作った炭を使って焼いて食べるといった活動も行っており、中・高の取組の一つとなっている。

【別添資料】 学年間・学校種間の連携を図るキャリア教育の実践に関する調査研究

炭活動に関する生徒の振り返り記述（一部抜粋）

1年生の生徒の記述

第1回炭活動（立て込み）（9月13日：金曜日）
 はじめての炭活動でした。最初は何をしたらいいかわからなかつたけど、先はい達が優しく教えてくれたので、自分もしっかり参加することができました。

第1回炭活動（炭出し）（11月5日：火曜日）
 炭活動では炭と木炭はどに分けたりしました。黒くかがやいているのが炭です。今年は全体的に炭が少なかつたと思いました。炭活動は初めてだけど、自分らしくかんはる事ができたので良かったです。

- ★他学年とのつながりを感じる振り返りの記述がある。
- ★活動を通して、自分の頑張りを振り返ることができている。

3年生の生徒の記述

第1回炭活動（立て込み）（9月13日：金曜日）
炭と木炭を最後まで木を入れていてきんぐと信じて思っていました。でも木炭は木炭なので3年生の言うことをきいていてもいいかなと思いましたが、みんなもきいてくれると思えました。炭出しは他の人よりも早くやることをがんばりました。今日の反省をいっせよし！！

第1回炭活動（炭出し）（11月5日：火曜日）
 炭はあんまりできてなかつたけど最後までみんな一生懸命にがんばって良いと思います。
校長先生は炭のことがよく分かっていてとても南中炭は好きだと思つた。今日の炭活動はみんな楽しかったと思います。
 炭のあんまりが少なかった。絆を戻して南中炭だね！！

- ★他者の良いところに気づき、それを認める記述と、自己の振り返りができている。
- ★炭活動に対する誇りや次回への意欲がみられる。
- ★教師側のフィードバックにより、生徒の自己肯定感を高める手立てがみられる。

【その他の実践紹介④】

大分豊府高等学校の「ミラ NAVI」

高校ではこれをやっておく！	自分の考えを他人に表現する	基礎体力の向上	知に習うこと、自ら考える	社会や環境問題、多様な意見を受け入れる
活かせる高校の科目	物理・数学・化学・家庭・政治・経済・社会	物理・数学・化学・情報	倫理・自治・現代社会・数学	政治・経済・現代社会・情報・歴史
つながりそうな職業・解決できそうな社会課題	建築士・福祉・地震の揺れに耐える家の構造	自動車整備士・環境配慮型エネルギー	心理カウンセラー	政治家・国家公務員・地方公務員

- ・ワークシートでは、「高校でこれをやっておく」「活かせる高校の科目」など、今の学びとつなげる項目が設定されている。



- ★「つながりそうな職業・解決できそうな社会課題」という欄もあり、社会でどう活かせるかを考えるきっかけとなっている。
- ★自己理解の深化に加え、進路の現実吟味、将来設計、社会的移行の準備が高等学校では必要となる。

「組織的な学校課題解決に向けた校内研究・校内研修」の推進に 関する調査研究（1年次／2年）

大分県教育センター教科研修・ICT推進部
指導主事 加藤 史章

I 研究の背景

県教育センターでは、平成23年度の調査研究「校内研究等の実施状況に関する調査―一層やりがいのある校内研究のために―」を踏まえ、『一層やりがいのある校内研究』手引書（以下「手引書」）を平成26年に刊行し、県内小・中学校に配布したが、刊行後10年が経過し、内容を見直す時期に来ている。また、中央教育審議会答申『令和の日本型学校教育』を担う教師の養成・採用・研修等の在り方について（令和4年12月）においては「新たな教師の学びの姿」の一つである「協働的な教師の学び」の中で、「校内研修や授業研究など、『現場の経験』を含む学びが、同僚との学び合いなどを含む場として重要であると考えられる。」と示され、校内研究・校内研修の充実が求められている。

II 現状と課題

大分県教育委員会は、「大分県公立学校教職員の人材育成方針（令和6年3月改訂）」において、「各学校における研究及び研修については、各学校の課題・重点目標など身近な課題意識に基づいて行われるものであり、教員の自己研鑽の意欲を高め、OJTによる資質向上を図るうえで重要な役割をもつことから、その成果が日常の教育活動へ転移、発展させる研修となるよう、内容の検討や方法の工夫が重要」と示している。しかし、県教育センターでは、平成23年度の調査（以下、「前回調査」）以降、現在の校内研究・校内研修に関する実態が十分に把握できておらず、特に高校（以下、「高」）は平成23年度の調査では調査対象外であったため、実態が掴めていない。

現状では、小・中学校（以下、「小・中」）は、在職期間7年以下の新任研究主任が33%（n=87）を占めている。よって、組織的で実践的な校内研究・校内研修を推進する手引書が求められる。

本研究は2年計画で実施し、大分県の校内研究・校内研修についての現状をアンケート調査を通して把握するとともに、令和の日本型学校教育を担う教師の研修の在り方や実践事例を紹介する「手引書」の改訂を行うことで、大分県の更なる校内研究・校内研修の推進に資する。

III 調査研究の内容

調査方法

県内の公立小・中（大分市を除く）と高を対象に、校種別のWebアンケート（令和6年7月19日～8月23日）を実施し、小169校、中71校、高校43校の計283校の回答を得られた。アンケートは主に「手引書の認知度と提唱する実践に関すること」、「校内研究・校内研修のテーマ設定に関すること」、「校内研究・校内研修における基本的心理欲求充足に関すること」、「校内研究・校内研修に予想されること」の4領域21の質問項目で構成し、校種と各質問項目でクロス集計を行った。（【別添資料】参照）校内研究と校内研修は、学校によって定義が異なる場合があるため、下記のように位置付け、回答を収集した。

○「校内研究」とは、研究主題を設定し、年度末に研究の成果をまとめること

○「校内研修」とは、教師の指導力向上のために、学校で計画を立てて実施する研修のこと
また、事例校調査として「NITS・教職大学院・教育委員会等コラボ研修プログラム支援事業」により、神奈川県公立学校2校を訪問し、校内研修に係る視察を行った。

IV 調査・研究の結果

1 手引書の認知度とその実践に関する結果

1-1 手引書の認知度と活用度に関する結果

手引書について、全校種で「知っている」と回答した割合は 60%であり、「活用したことがある」と回答した割合は 19%に留まっている。

1-2 研究仮説の必要性に関する結果

校内研究における「研究仮説の必要性」について、前回調査と同項目で調査し、校種別にまとめた(表 1 参照)

表 1 校内研究を実施する上で「研究仮説」を立てることの必要性について

【令和 6 年度調査】

校種	選択肢 必要である	どちらか といえば 必要	どちらか といえば 必要ない	必要で ない
小 (n=169)	46%	31%	17%	7%
中 (n=71)	32%	46%	15%	7%
小・中計(n=240)	42%	35%	16%	6%
高 (n=28)	32%	61%	4%	4%
計 (n=268)	41%	38%	15%	6%

【平成 23 年度調査】

校種	選択肢 必要である	どちらか といえば 必要	どちらか といえば 必要ない	必要で ない
小 (n=301)	90%	7%	2%	1%
中 (n=133)	81%	17%	1%	1%
計 (n=434)	87%	10%	2%	1%

※平成 23 年度調査では、高等学校は調査対象外。

※高はテーマ設定をしている 28 校のみ回答。

小・中の前回調査では「必要である」と回答した割合が全体の 87%であったが、今回の調査では 42%と低くなっている。否定的回答(「どちらかといえば必要ない」+「必要ない」を表す)も、前回の 3%から 21%となり、「研究仮説の必要性」を感じていない学校が増加した。高では、肯定的回答(「必要である」+「どちらかといえば必要である」を表す)が 93%と著しく高い。

1-3 手引書の提唱する実践に関する結果

少人数チームの編成については、全校種で 77%の学校が実践している。校種別では、小が 83%、中が 74%、高が 54%の学校が少人数チームを組織している。学校課題に応じた研究期間の設定状況については、手引書が提唱する「1年間といった研究期間ではなく、学校課題に応じた研究期間を設定している」学校は 30%である。

2 校内研究・校内研修のテーマ設定に関する結果

2-1 校内研究・校内研修のテーマの設定について

今年度の校内研究・校内研修の学校全体のテーマ設定については、小・中は 100%であり、高は、64%であった。国立教育政策研究所(2010)によると、「校内研究等の実施状況に関する調査」での類似質問(「学校として一つの研究テーマを設定し、校内研究に取り組んでいる」)に対する肯定的回答の割合は公立高校では 35%であり、全国のデータと比較すると高い。

2-2 校内研究・校内研修の研究テーマに影響した要因

表 2 は、研究テーマの設定に影響した要因について、想定されう

表 2 テーマに影響した要因

校種	ア	イ	ウ	エ	オ
小 (n=169)	91%	86%	81%	83%	74%
中 (n=71)	88%	87%	89%	70%	81%
高 (n=28)	91%	68%	72%	70%	72%
計 (n=268)	93%	87%	85%	78%	78%

ア：学校教育目標

イ：昨年度までの研究成果や研究関心の継続

ウ：現在、直面している学校課題

エ：学校全体の教職員のニーズや意見

オ：学力調査やアンケートに基づく児童・生徒の実態

る要素を 15 項目設け、肯定的回答の割合の高い 5 項目について、度合いの高いものから順に並べたものである。全校種で、「学校教育目標」の割合が 93%と高い一方で、「学校全体の教職員のニーズや

「組織的な学校課題解決に向けた校内研究・校内研修」の推進に関する調査研究

意見」や「学力調査やアンケート調査に基づく児童の実態」の割合が78%とやや低くなっている。

3 校内研究・校内研修における基本的心理欲求充足¹⁾に関する結果

表3は、校内研究・校内研修における「手引書の活用」「課題に応じた研究期間の設定」「少人数チーム」「学校課題の共有」「教職員のチームワーク」「児童生徒理解の更なる深まり」の有無による学校群を比較するために、問14～18の5つの質問の回答より基本的心理欲求充足の平均値の差を算出し、t検定を実施したものである。

①～⑥の全ての項目において、「あり」群のほうが基本的心理欲求充足(自律性、有能感、関係性)の平均値が高かった。各項目の有無による平均値の差についてt検定を行ったところ、②、④、⑤、⑥の項目において、有意差が認められた。以上の結果から、「手引書」で提言されていた「課題に応じた研究期間の設定」がなされている学校

群や、「学校課題の共有」「教職員のチームワーク」「児童生徒理解の更

なる深まり」が期待される学校群では、そうではない学校群に比べて基本的心理欲求が充足される可能性があることが示唆された。

4 校内研究・校内研修の予想されること(成果と課題)に関する結果

4-1 今年度の予想される成果について

表4は、今年度の校内研究・校内研修の予想される成果について、割合の高い上位6項目について、順に並べたものである。全校種で「教職員の知識・見識の更新」「教科指導力向上」への期待が高い一方で、「教職員のチームワーク向上」に対する期待が最も低い。

4-2 今年度の校内研究・校内研修の課題に関するアンケート結果

表5は今年度の校内研究・校内研修の課題に関するアンケート結果をまとめたものである。課題意

表3 各項目の有無による基本的心理欲求充足の平均値の差

	あり (n)	なし・知らない (n)	t値 (自由度)
①手引書の活用	54	229	281
基本的心理欲求充足(平均値)	4.51	4.40	1.388
標準偏差	0.46	0.51	
②課題に応じた研究期間の設定	80	189	267
基本的心理欲求充足(平均値)	4.55	4.39	2.555*
標準偏差	0.45	0.51	
③少人数チーム	215	68	281
基本的心理欲求充足(平均値)	4.44	4.38	0.873
標準偏差	0.50	0.49	
④学校課題の共有	179	104	281
基本的心理欲求充足(平均値)	4.47	4.34	2.123*
標準偏差	0.49	0.50	
⑤教職員のチームワーク	147	136	248.8
基本的心理欲求充足(平均値)	4.60	4.24	6.421***
標準偏差	0.40	0.53	
⑥児童生徒理解の更なる深まり	173	110	281
基本的心理欲求充足(平均値)	4.52	4.27	4.190***
標準偏差	0.47	0.51	

*p<.05, **p<.01, ***p<.001

※教職員のチームワークのみ、等分散を仮定しない場合の結果を示す。

自律性	ア：勤務校の教員は校内研究・校内研修に主体的に取り組んでいると思いますか。(問14)
有能感	イ：勤務校の教員は、校内研究・校内研修の際、個々の能力が発揮できていると思いますか。(問15)
関係性	ウ：勤務校の教員は、校内研究・校内研修の際、互いの伝えたいことが発言できていますか。(問16)
	エ：勤務校の教員は、同僚と良好な人間関係で校内研究・校内研修に取り組んでいると思いますか。(問17)
	オ：勤務校の教員は、校内研究・校内研修を通して、同僚との親近感が増したと感じていると思いますか。(問18)

表4 今年度の校内研究・校内研修の予想される成果

選択肢 校種	教職員の 知識・見 識の更新	教科 指導力 向上	学校 課題 の共有	児童・ 生徒理 解の深 まり	児童・ 生徒の 学力向 上	教職員 のチー ムワー ク向上
小 (n=169)	81%	73%	62%	67%	58%	55%
中 (n=71)	82%	85%	72%	56%	64%	49%
高 (n=43)	86%	84%	54%	49%	30%	44%
計 (n=283)	83%	78%	63%	62%	56%	52%

識が最も高いものは、時間の設定・確保であり、前回調査同様に 8 割近い学校が課題と感じている。特に、中学校では時間の設定・確保が難しいと感じている学校の割合が増えている。研究成果の積み上げが不十分なことに関しても、課題と感じている学校が多い。

表 5 今年度の校内研究・校内研修の課題に関するアンケート結果

選択肢 校種	時間の設定・確保が難しい	教員の参加意欲が十分でない	リーダーシップが十分に発揮されていない	高め合う雰囲気十分でない	研究成果の積み上げが十分でない	学校の課題解決に十分に繋がっていない
小 (n=169)	75(78)%	6(4)%	10(26)%	2(10)%	19(24)%	8(9)%
中 (n=71)	83(77)%	8(12)%	22(32)%	4(12)%	32(29)%	7(9)%
高 (n=43)	72%	0%	5%	2%	21%	7%
計 (n=283)	78(78)%	8(6)%	12(28)%	3(11)%	23(26)%	8(9)%

※括弧内は前回調査の値を表す。高校は前回調査なし。

5 事例校調査について

校内研究・校内研修に係る事例校調査として、神奈川県茅ヶ崎市立萩園中学校と神奈川県横須賀市立大塚台小学校に訪問し、以下のような好事例を視察することができた。

- ① 事前研、事後研ともお互いを尊重した対話が重視された研修会を実施していた。
- ② 指導案等の資料の中に、子どもについてのコメント入りの座席表があった。
- ③ 研究主任が教職員の適性や持ち味、現在の困りごとについて把握していた。
- ④ 事後研の中で、授業中の児童生徒の様子や実態から議論を深めていた。
- ⑤ 学校アンケートの「目指す子どもの姿」や「学校テーマ」を軸に授業研究を行っていた。

V 考察

1 「IV 調査・研究の結果」に関する考察

1-1 手引書の認知度とその実践に関する結果

手引書の認知度は 60%であり、活用度は 19%であったが、研究仮説の必要性に関しては、「必要である」と回答した割合が、大幅に減少したことから、手引書が提唱する仮説検証型にこだわらない校内研究の考え方が広がっていると考えられる。藤本(2017)は授業研究について、「日常的な授業研究の遂行において、仮説検証型はなじまない。仮説を有して実践に臨むことを決して否定しているのではない。」「教師の授業研究に関する信念、すなわち授業研究観が旧来の仮説検証型を指向するものでは当事者としての成長は期待しづらい。」と述べている。新たな手引書では、引き続き「仮説検証型」から「課題解決型」にシフトする校内研究・校内研修を推進していくことについて掲載する。

1-2 校内研究・校内研修のテーマ設定に関する結果

学校の研究テーマの設定にあたり、「学校教育目標」や「前年度までの研究の継続」からの影響を強く受けているものの、「学校全体の教職員のニーズ」や「学力調査」や「アンケート」等のデータに基づく校内研究・校内研修テーマの設定はやや低く、教育データのさらなる利活用が求められている。

1-3 校内研究・校内研修における基本的心理欲求充足に関する結果

手引書を活用した実践や校内研究・校内研修に各種成果の期待をすることは、基本的心理欲求がおおむね充足される傾向にあると考えられる。

1-4 今年度の校内研究・校内研修の予想されることに関する結果

予想される課題として、「時間の設定・確保」や「研究成果の積み上げ」を挙げている学校の割合は多く、新たな手引書に事例等を載せる必要がある。「リーダーシップ」や「高めあう雰囲気」については、前回調査より大幅に上昇しており、平成 24 年度に策定された「芯の通った学校組織」活用推進プランの影響であると考えられる。

1-5 事例校調査について

事例校調査を通して、事例①より「自由に発言できる心理的安全性の確保」、事例②、③より「授業

「組織的な学校課題解決に向けた校内研究・校内研修」の推進に関する調査研究

者の願いや思いを引き出すこと」、事例④より「子どもの姿から語ること」、事例⑤より「学校の共創ビジョン」の重要性が示唆される。大島(2017)は「教師の自律的な学びを支える関係性の構築」について、「ポイントは1. 授業者の願いや意図の尊重、2. 子供の姿の共有、の2点である。授業の願いや意図が受け止められ、具体的な子どもの姿を根拠に改善策が提案される場合は、授業者は自らの自律性が支えられたと感じる。」と語る

また、佐古(2019)は「共創ビジョン作成の方法」について、次の4つの段階を挙げている。

1. 子供たちの実態の確認と共有
2. 子供の実態の背景にある要因(根っこ課題)についての探究
3. 育成課題(育てたい子供の姿)の設定
4. 取組課題(実践課題)の設定

上記の研究者の提唱する視点についても、紹介する場を新たな手引書には設けたい。

2 成果と課題

本調査は、平成23年と令和6年の比較により、校内研究・校内研修について、アンケート調査から把握することができた。調査の結果、

1. 手引書の活用状況
2. 手引書の取組と校内研究・校内研修における心理的欲求充足に関連があること
3. 学校が自律的に自校の課題からテーマを設定していくこと
4. 校内研究・校内研修における時間の設定・確保、成果の積み上げ、組織的取組が課題であること、
5. 新たな手引書の方向性の5点が分かった。

上記より、本調査研究は県内において実施される校内研究・校内研修についての実態を知り、新たな手引書の方向性を示す貴重な資料となったと言える。課題としては、県外の先進校への視察を通して事例を収集することができたが、県内の学校の事例を得ることができなかった。

3 次年度の研究に向けて

次年度の調査研究では、以下2点を実施する。

1. 点目は、インタビュー調査等を通じた実践事例の収集である。
2. 点目は、手引書の改訂にむけて、組織的な学校課題の解決に寄与できる掲載内容の確定である。

具体的には以下の4項目を紹介できる内容としたい。

1. 校内研究・校内研修の時間確保に向けた組織的取り組み
2. 学校課題の焦点化に向けたICT活用
3. 校内研修の短時間化の手立てと推奨時期
4. 新しい事例校

今回、手引書を見直す中で、手引書が校種を問わず、多様な学校課題の改善・解決を目指す「課題解決型校内研究」を推進するものであることが確認できた。新たな手引書には、研究者から評価されているⁱ「課題解決型校内研究」の部分は残しつつ、校内研究・校内研修にて多くの学校が課題として挙げている問題の解決に繋がる内容を掲載し、児童生徒に還元できる組織的な学校課題解決に向けた校内研究・校内研修を推し進めるものにしたいと考えている。

VI 参考文献等

- 大島崇 『授業研究』を創る』鹿毛雅治・藤本和久＝編著 教育出版 第1部 第3章
藤本和久 『授業研究』を創る』鹿毛雅治・藤本和久＝編著 教育出版 第1部 第2章
佐古秀一 「管理職のための学校経営 R-PDCA」 明治図書

註

ⁱ Deci & Ryan が提唱した自己決定理論における重要な要素。個人の内面的な適応状態の指標として3つの基本的心理的欲求(自律性への欲求、有能さへの欲求、関係性への欲求)の充足を挙げている。

ⁱⁱ 石井英真・熊井将太・川地亜弥子・藤本和久・赤木和重・渡辺貴裕・亘理陽一・木村拓也・杉田浩崇・山下晃一(2021)「流行に踊る日本の教育」163-170頁

「組織的な学校課題解決に向けた校内研究・校内研修」の推進に関する調査研究

【別添資料 1 : アンケート質問および回答一覧】

- ・各質問と校種別の回答状況は以下の通りである。
- ・表において、小学校は「小」、中学校は「中」、高等学校は「高」と表記している。
- ・回答の割合は、小数第1位を四捨五入した値で示しているため、100%にならない場合がある。
- ・【質問1】【質問2】【質問3】については、フェイスシートのため、省略している。
- ・【質問7】については、学校ごとの校内研究・校内研修テーマのため、そのままの形で掲載せずに、30校以上で用いられている頻出語をまとめた。

【質問4】今回、アンケートを回答される方は、どなたでしょうか。

- ア：校長
 イ：副校長・教頭
 ウ：主幹教諭
 エ：指導教諭
 オ：研究主任（研修主任）
 カ：研究（研修）を担当する教職員
 キ：学年主任
 ク：その他の教職員

校種 \ 選択肢	ア	イ	ウ	エ	オ	カ	キ	ク
小 (n=169)	0%	3%	1%	7%	85%	4%	1%	0%
中 (n=71)	1%	2%	2%	7%	80%	2%	3%	0%
高 (n=43)	0%	27%	22%	33%	4%	8%	0%	4%
計 (n=283)	0%	6%	4%	11%	71%	4%	2%	0%

【質問5】平成 26 年 3 月に大分県教育センターが発行した「一層やりがいのある校内研究」手引書について、あてはまる番号を1つ選んでください。

- ア：知っているし、校内で活用したことがある
 イ：知っているが、校内で活用したことがない
 ウ：知らない

校種 \ 選択肢	ア	イ	ウ
小 (n=169)	22%	36%	42%
中 (n=71)	18%	47%	35%
高 (n=43)	9%	54%	37%
計 (n=283)	19%	41%	40%

【質問6】今年度の学校全体の校内研究・校内研修テーマの設定について、あてはまるものを選んでください。

- ア：設定している
 イ：設定していない

校種 \ 選択肢	ア	イ
小 (n=169)	100%	0%
中 (n=71)	100%	0%
高 (n=43)	64%	36%
計 (n=283)	95%	5%

「組織的な学校課題解決に向けた校内研究・校内研修」の推進に関する調査研究

【質問 7】 今年度の学校全体の校内研究・校内研修テーマを教えてください。

	小学校 (169校)	中学校 (71校)	高校 (28校)	全体 (268校)
育成	99 (59%)	46 (64%)	13 (46%)	158 (59%)
授業	79 (47%)	33 (46%)	21 (75%)	133 (49%)
学び	65 (39%)	37 (51%)	11 (39%)	113 (42%)
力	49 (29%)	37 (51%)	23 (82%)	109 (41%)
考え	77 (46%)	15 (21%)		92 (34%)
主体的	57 (34%)	23 (32%)	10 (36%)	90 (34%)
子ども	74 (44%)			74 (28%)
できる	48 (28%)	19 (26%)		67 (25%)
表現	47 (28%)	16 (22%)	3 (11%)	66 (25%)
生徒		49 (68%)	14 (50%)	63 (23%)
自分	43 (25%)	10 (14%)		53 (20%)
対話	22 (13%)	8 (11%)	5 (18%)	35 (13%)
学習	17 (10%)	11 (15%)	6 (21%)	34 (13%)
自ら	21 (12%)	9 (13%)	1 (4%)	31 (12%)
活動	20 (12%)	10 (14%)	1 (4%)	31 (12%)
学ぶ	15 (9%)	13 (18%)	3 (11%)	31 (12%)

【質問 8】 今年度の学校全体の研究テーマは前年度以前から継続されているものですか。あてはまるものを選んでください。

- ア：今年度から新たに設定された
 イ：昨年度から継続している
 ウ：2年前から継続している
 エ：3年以上前から継続している

校種 \ 選択肢	ア	イ	ウ	エ
小 (n=169)	33%	30%	23%	13%
中 (n=71)	37%	39%	18%	6%
高 (n=28)	18%	32%	21%	29%
計 (n=268)	32%	33%	21%	12%

【質問 9】 どなたが今年度の学校全体の研究テーマの設定にかかわりましたか。あてはまるものを選んでください。
(複数選択可)

- ア：校長
 イ：副校長・教頭
 ウ：主幹教諭
 エ：指導教諭
 オ：研究主任（研修主任）
 カ：研究（研修）を担当する教職員
 キ：学年主任
 ク：その他の教職員
 ケ：児童生徒
 コ：地域の方や保護者

校種 \ 選択肢	ア	イ	ウ	エ	オ	カ	キ	ク	ケ	コ
小 (n=169)	92%	82%	16%	14%	95%	36%	18%	59%	0%	0%
中 (n=71)	94%	82%	24%	14%	96%	42%	40%	47%	1%	0%
高 (n=28)	60%	79%	64%	86%	18%	39%	18%	18%	0%	0%
計 (n=268)	90%	81%	23%	22%	88%	38%	29%	52%	0%	0%

「組織的な学校課題解決に向けた校内研究・校内研修」の推進に関する調査研究

【質問 10】 研究テーマの設定にあたって、以下の 1.～15. の要素はどれほど影響しましたか。それぞれの要素ごとに、以下の①～⑤で回答してください。⑤の「とても影響した」は特に影響したものを 3 つまでとしてください。

1. 昨年度までの研究成果や研究関心の継続

- ア：影響しなかった
 イ：ほとんど影響しなかった
 ウ：やや影響した
 エ：影響した
 オ：とても影響した（3 つまで）

校種 \ 選択肢	ア	イ	ウ	エ	オ
小 (n=169)	1%	1%	11%	42%	44%
中 (n=71)	1%	3%	8%	40%	47%
高 (n=28)	3%	0%	28%	34%	34%
計 (n=268)	1%	1%	13%	42%	45%

2. 自治体（県や市）による方針や要請

- ア：影響しなかった
 イ：ほとんど影響しなかった
 ウ：やや影響した
 エ：影響した
 オ：とても影響した（3 つまで）

校種 \ 選択肢	ア	イ	ウ	エ	オ
小 (n=169)	6%	12%	26%	45%	11%
中 (n=71)	4%	10%	32%	42%	13%
高 (n=28)	19%	13%	31%	22%	16%
計 (n=268)	7%	12%	29%	42%	12%

3. 学習指導要領

- ア：影響しなかった
 イ：ほとんど影響しなかった
 ウ：やや影響した
 エ：影響した
 オ：とても影響した（3 つまで）

校種 \ 選択肢	ア	イ	ウ	エ	オ
小 (n=169)	4%	7%	26%	57%	6%
中 (n=71)	1%	8%	36%	47%	7%
高 (n=28)	6%	0%	6%	66%	22%
計 (n=268)	4%	6%	28%	57%	8%

4. 学校教育目標

- ア：影響しなかった
 イ：ほとんど影響しなかった
 ウ：やや影響した
 エ：影響した
 オ：とても影響した（3 つまで）

校種 \ 選択肢	ア	イ	ウ	エ	オ
小 (n=169)	0%	0%	9%	52%	39%
中 (n=71)	0%	0%	13%	35%	53%
高 (n=28)	0%	0%	6%	50%	41%
計 (n=268)	1%	0%	9%	49%	44%

5. 管理職（校長・副校長・教頭）の専門性

- ア：影響しなかった
 イ：ほとんど影響しなかった
 ウ：やや影響した
 エ：影響した
 オ：とても影響した（3 つまで）

校種 \ 選択肢	ア	イ	ウ	エ	オ
小 (n=169)	16%	23%	27%	29%	5%
中 (n=71)	7%	19%	38%	31%	6%
高 (n=28)	19%	28%	28%	22%	3%
計 (n=268)	14%	23%	31%	29%	5%

「組織的な学校課題解決に向けた校内研究・校内研修」の推進に関する調査研究

6. 研究主任や研究部など研究を担当する教職員の専門性

- ア：影響しなかった
 イ：ほとんど影響しなかった
 ウ：やや影響した
 エ：影響した
 オ：とても影響した（3つまで）

校種 \ 選択肢	ア	イ	ウ	エ	オ
小 (n=169)	17%	23%	31%	27%	4%
中 (n=71)	7%	22%	36%	32%	3%
高 (n=28)	16%	22%	16%	38%	10%
計 (n=268)	15%	23%	31%	30%	4%

7. 学校全体の教職員のニーズや意見

- ア：影響しなかった
 イ：ほとんど影響しなかった
 ウ：やや影響した
 エ：影響した
 オ：とても影響した（3つまで）

校種 \ 選択肢	ア	イ	ウ	エ	オ
小 (n=169)	1%	4%	13%	46%	37%
中 (n=71)	0%	0%	31%	49%	21%
高 (n=28)	6%	3%	22%	60%	10%
計 (n=268)	1%	3%	20%	49%	30%

8. 教職員数や若手の比率といった職員構成

- ア：影響しなかった
 イ：ほとんど影響しなかった
 ウ：やや影響した
 エ：影響した
 オ：とても影響した（3つまで）

校種 \ 選択肢	ア	イ	ウ	エ	オ
小 (n=169)	15%	23%	30%	24%	8%
中 (n=71)	11%	26%	31%	26%	6%
高 (n=28)	28%	25%	19%	22%	6%
計 (n=268)	16%	25%	30%	25%	7%

9. 学力調査やアンケートに基づく児童の実態

- ア：影響しなかった
 イ：ほとんど影響しなかった
 ウ：やや影響した
 エ：影響した
 オ：とても影響した（3つまで）

校種 \ 選択肢	ア	イ	ウ	エ	オ
小 (n=169)	2%	5%	19%	47%	27%
中 (n=71)	3%	0%	17%	49%	32%
高 (n=28)	6%	3%	19%	44%	28%
計 (n=268)	3%	3%	19%	49%	29%

10. 児童生徒のニーズや意見

- ア：影響しなかった
 イ：ほとんど影響しなかった
 ウ：やや影響した
 エ：影響した
 オ：とても影響した（3つまで）

校種 \ 選択肢	ア	イ	ウ	エ	オ
小 (n=169)	15%	21%	31%	27%	5%
中 (n=71)	3%	11%	43%	38%	6%
高 (n=28)	13%	19%	22%	44%	3%
計 (n=268)	12%	19%	34%	33%	5%

11. 地域や保護者のニーズや意見

- ア：影響しなかった
 イ：ほとんど影響しなかった
 ウ：やや影響した
 エ：影響した
 オ：とても影響した（3つまで）

校種 \ 選択肢	ア	イ	ウ	エ	オ
小 (n=169)	20%	28%	30%	19%	2%
中 (n=71)	3%	31%	46%	19%	1%
高 (n=28)	6%	34%	19%	34%	6%
計 (n=268)	14%	31%	34%	21%	3%

「組織的な学校課題解決に向けた校内研究・校内研修」の推進に関する調査研究

12. 地域の良さやリソース（資源）

- ア：影響しなかった
 イ：ほとんど影響しなかった
 ウ：やや影響した
 エ：影響した
 オ：とても影響した（3つまで）

校種 \ 選択肢	ア	イ	ウ	エ	オ
小 (n=169)	22%	34%	23%	17%	4%
中 (n=71)	8%	42%	32%	17%	1%
高 (n=28)	13%	34%	19%	25%	9%
計 (n=268)	18%	37%	25%	18%	4%

13. 学校の歴史や伝統

- ア：影響しなかった
 イ：ほとんど影響しなかった
 ウ：やや影響した
 エ：影響した
 オ：とても影響した（3つまで）

校種 \ 選択肢	ア	イ	ウ	エ	オ
小 (n=169)	26%	32%	27%	15%	1%
中 (n=71)	8%	42%	35%	15%	0%
高 (n=28)	16%	22%	34%	25%	3%
計 (n=268)	21%	34%	31%	16%	1%

14. 小中や中高の校種間連携

- ア：影響しなかった
 イ：ほとんど影響しなかった
 ウ：やや影響した
 エ：影響した
 オ：とても影響した（3つまで）

校種 \ 選択肢	ア	イ	ウ	エ	オ
小 (n=169)	23%	26%	24%	19%	9%
中 (n=71)	7%	26%	35%	28%	4%
高 (n=28)	22%	28%	13%	31%	6%
計 (n=268)	19%	27%	26%	24%	7%

15. 現在、直面している学校課題

- ア：影響しなかった
 イ：ほとんど影響しなかった
 ウ：やや影響した
 エ：影響した
 オ：とても影響した（3つまで）

校種 \ 選択肢	ア	イ	ウ	エ	オ
小 (n=169)	2%	2%	15%	47%	34%
中 (n=71)	0%	0%	11%	47%	42%
高 (n=28)	6%	0%	22%	41%	31%
計 (n=268)	2%	1%	15%	48%	37%

【質問 11】 校内研究を実施する上で「研究仮説」を立てることが必要だと思いますか。あてはまるものを選んでください。

- ア：研究仮説は必要である
 イ：研究仮説はどちらかといえば必要である
 ウ：研究仮説はどちらかといえば必要でない
 エ：研究仮説は必要でない

校種 \ 選択肢	ア	イ	ウ	エ
小 (n=169)	46%	31%	17%	7%
中 (n=71)	32%	46%	15%	7%
高 (n=28)	32%	61%	4%	4%
計 (n=268)	41%	38%	15%	6%

「組織的な学校課題解決に向けた校内研究・校内研修」の推進に関する調査研究

【質問 12】 1年間といった、決まった「研究期間」ではなく、学校課題に応じた「研究期間」を設定していますか。あてはまるものを選んでください。

- ア：設定している
 イ：設定していない

校種 \ 選択肢	ア	イ
小 (n=169)	30%	70%
中 (n=71)	31%	69%
高 (n=29)	28%	72%
計 (n=269)	30%	70%

【質問 13】 校内研究・校内研修を進める上で、少人数(3～5名程度)の「チーム」を組織していますか。あてはまるものを選んでください。

- ア：組織している
 イ：組織していない

校種 \ 選択肢	ア	イ
小 (n=169)	83%	17%
中 (n=71)	74%	26%
高 (n=43)	54%	47%
計 (n=283)	77%	24%

【質問 14】 勤務校の教員は校内研究・校内研修に主体的に取り組んでいると思いますか。あてはまるものを選んでください。

- ア：取り組んでいる
 イ：やや取り組んでいる
 ウ：どちらともいえない
 エ：あまり取り組んでいない
 オ：取り組んでいない

校種 \ 選択肢	ア	イ	ウ	エ	オ
小 (n=169)	58%	39%	4%	0%	0%
中 (n=71)	46%	46%	8%	0%	0%
高 (n=43)	49%	33%	19%	0%	0%
計 (n=283)	54%	40%	7%	0%	0%

【質問 15】 勤務校の教員は、校内研究・校内研修の際、個々の能力が発揮できていると思いますか。あてはまるものを選んでください。

- ア：できている
 イ：ややできている
 ウ：どちらともいえない
 エ：あまりできていない
 オ：できていない

校種 \ 選択肢	ア	イ	ウ	エ	オ
小 (n=169)	49%	46%	5%	0%	0%
中 (n=71)	44%	45%	10%	1%	0%
高 (n=43)	28%	56%	16%	0%	0%
計 (n=283)	46%	47%	8%	0%	0%

【質問 16】 勤務校の教員は、校内研究・校内研修の際、互いの伝えたいことが発言できていますか。あてはまるものを選んでください。

- ア：できている
 イ：ややできている
 ウ：どちらともいえない
 エ：あまりできていない
 オ：できていない

校種 \ 選択肢	ア	イ	ウ	エ	オ
小 (n=169)	58%	37%	5%	1%	0%
中 (n=71)	63%	31%	7%	0%	0%
高 (n=43)	58%	30%	12%	0%	0%
計 (n=283)	60%	34%	6%	0%	0%

「組織的な学校課題解決に向けた校内研究・校内研修」の推進に関する調査研究

【質問 17】 勤務校の教員は、同僚と良好な人間関係で校内研究・校内研修に取り組んでいると思いますか。あてはまるものを選んでください。

- ア：取り組んでいる
イ：やや取り組んでいる
ウ：どちらともいえない
エ：あまり取り組んでいない
オ：取り組んでいない

校種 \ 選択肢	ア	イ	ウ	エ	オ
小 (n=169)	69%	27%	4%	0%	0%
中 (n=71)	63%	32%	6%	0%	0%
高 (n=43)	56%	35%	9%	0%	0%
計 (n=283)	66%	30%	5%	0%	0%

【質問 18】 勤務校の教員は、校内研究・校内研修を通して、同僚との親近感が増したと感じていると思いますか。あてはまるものを選んでください。

- ア：感じている
イ：やや感じている
ウ：どちらともいえない
エ：あまり感じていない
オ：感じていない

校種 \ 選択肢	ア	イ	ウ	エ	オ
小 (n=169)	37%	50%	12%	0%	0%
中 (n=71)	25%	51%	21%	2%	0%
高 (n=43)	28%	47%	23%	0%	2%
計 (n=283)	34%	50%	16%	1%	0%

【質問 19】 今年度の校内研究・校内研修の予想される成果について、あてはまるものを選んでください。
(複数回答可)

- ア：教職員の知識・見識の更新
イ：教職員のチームワーク向上
ウ：児童生徒理解の更なる深まり
エ：教科指導力向上
オ：学校課題の共有
カ：学級経営力向上
キ：児童生徒の学力向上

校種 \ 選択肢	ア	イ	ウ	エ	オ	カ	キ
小 (n=169)	81%	55%	67%	73%	62%	30%	58%
中 (n=71)	82%	49%	56%	85%	72%	15%	64%
高 (n=43)	86%	44%	49%	84%	54%	5%	30%
計 (n=283)	83%	52%	62%	78%	63%	23%	56%

【質問 20】 今年度の校内研究・校内研修の課題について、あてはまるものを選んでください。
(複数回答可)

- ア：時間の設定・確保が難しい。
イ：教員の参加意欲が十分でない。
ウ：リーダーシップが十分に発揮されていない。
エ：批評が時として批判となり、高め合う雰囲気十分でない。
オ：仮説の検証（客観性等）が十分でない。
カ：研究成果の積み上げが十分でない。
キ：研究の内容が日常の教育実践に十分活かされていない。
ク：学校の課題解決に十分に繋がっていない。
ケ：ノルマ化され、義務的な業務になっている。
コ：形骸化されてしまい、形だけ整えるものとなっている。

校種 \ 選択肢	ア	イ	ウ	エ	オ	カ	キ	ク	ケ	コ
小 (n=169)	75%	6%	10%	2%	16%	19%	9%	8%	8%	6%
中 (n=71)	83%	8%	22%	4%	18%	32%	10%	7%	10%	1%
高 (n=43)	72%	0%	5%	2%	21%	21%	9%	7%	14%	2%
計 (n=283)	78%	8%	12%	3%	23%	23%	10%	8%	10%	4%

【質問 21】 効果的・効率的な校内研究・校内研修の在り方はどうあれば良いか、ご意見等をご記入ください。

主な内容

1. 研究・研修の計画とマネジメント

- ・明確な計画立案：研究テーマや年間計画を明確に設定し、詰め込み過ぎず、焦点を絞る。
- ・管理職・研究主任のリーダーシップ：柔軟なマネジメントで全職員が主体的に関われる環境を整備する。
- ・前年度の引き継ぎとチーム連携：引き継ぎを通じて研究を継続し、職員間の共通理解を図る。

2. 効率的な研修運営

- ・時間確保と短時間研修：勤務時間内に収まるようにし、負担感を軽減。30～60分程度の研修設定や午前中授業を活用する。
- ・日常実践との連携：日常の取り組みや実践事例を共有し、研修に活かす。
- ・ICTの活用：資料共有やグループ討議にICT機器を活用して効率化を図る。

3. 教職員の主体的な関与

- ・少人数チームでの討議：職員が発言しやすい環境を整え、全員が自分事として取り組む体制を構築する。
- ・若手教職員の支援：若手が発言しやすい場作りや具体的なモデル提示を行う。
- ・心理的安全性の確保：スムーズなコミュニケーションと良好な人間関係を重視する。

4. 実践と検証の循環

- ・成果の視覚化：研究内容が見える化し、全員で共有・再検証をする。
- ・課題解決型の研究：児童や学校の実態に基づき、課題を解決する実践を進める。
- ・継続的な改善：定期的に進捗を検証し、柔軟に改善を図る。

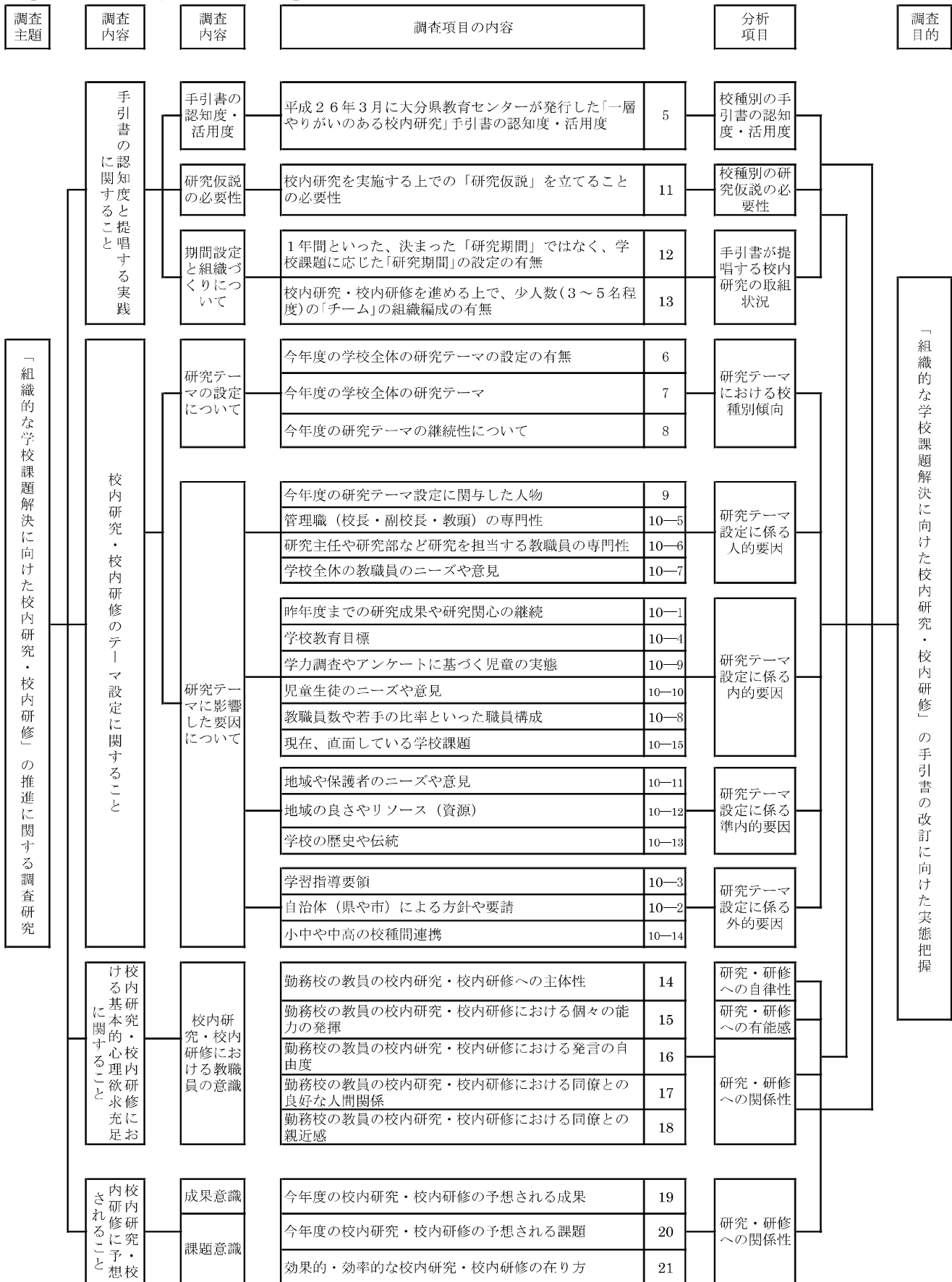
5. 研究内容の実効性と即時性

- ・教育実践に直結：研究成果が日常の授業や学級経営にすぐ活用できる内容にする。
- ・児童の成長を重視：児童の学習や生活の実態に即した指導法を追求する。
- ・専門性の向上：外部専門家の活用や互見授業を充実させる。

6. 負担軽減と働き方改革との両立

- ・過度な準備負担の軽減：効率的な資料作成やデータ活用で教職員の負担軽減を図る。
- ・気軽に取り組める研究環境：構えず気楽に参加できる校内研修の実現を目指す。

【別添資料2：調査内容構成図】



「組織的な学校課題解決に向けた校内研究・校内研修」の手引書の改訂に向けた実態把握

小・中学校の特別支援学級及び通級指導教室における 自立活動に関する研究（2年次／2年）

—「小・中学校特別支援学級・通級指導教室における

自立活動Q&Aハンドブック」の作成—

大分県教育センター特別支援教育部
指導主事 財津 誠一

I 調査研究の背景と目的

大分県における小・中・義務教育学校の特別支援学級数、在籍児童生徒数は、近年急増し、令和6年度は令和元年度と比較し、学級数が約1.4倍、児童生徒数は1.8倍となっている（表1）。一方、通級による指導は、令和6年度と令和元年度を比べると、教室数は微増、児童生徒数は微減であるが（表2）、令和7年2月に示された大分県長期教育計画（案）では、通級による指導を受ける児童生徒数を令和15年度に643人と、今後増加させる目標値が設定されている。特別支援学級や通級による指導は、障がいのある児童生徒の多様な学びの場として、指導の一層の充実が求められている。

一方、本センターにおける令和4年度の「通級指導教室における指導の実態と課題に関するアンケート調査」と令和5年度の「小・中学校特別支援学級の自立活動に関する実態調査」（以下、令和4・

5年度実態調査とする）によると、特別支援学級担任や通級指導教室担当者は、担当経験年数3年未満が大半を占め（図1・図2）、専門性の向上が課題と言える。また、通級指導教室においては、通級指導教室の種別に関わらず多様な障がい種の児童生徒が通い、授業形態は個別の指導に加えて、グループ別や合同でも行っていた。特別支援学級においても、特別支援学級の種別に関わらず、他の障がいもある児童生徒が在籍し、児童生徒数は平均4.3人であり、6人以上の学級が29.7%であった。特別支援学級担任及び通級指導教室担当は、様々な障がいに関する知識や多人数を同時に指導する高い専門性が必要であることが明らかになった。更に、特別支援学級における自立活動の指導の課題や困難については、「児童生徒が複数いる時の指導」、「教材の設定や授業の展開など授業を構想すること」、「目標や具体的な指

表1 大分県の特別支援学級の学級数及び児童生徒数

		令和元年	令和6年
小・中 学校等	学級数(学級)	584	826
	児童生徒数(人)	2,358	4,332

表2 大分県の通級による指導の教室数及び児童生徒数

		令和元年	令和6年
小・中 学校等	教室数(教室)	45	51
	児童生徒数(人)	491	475

特別支援教育課調べ

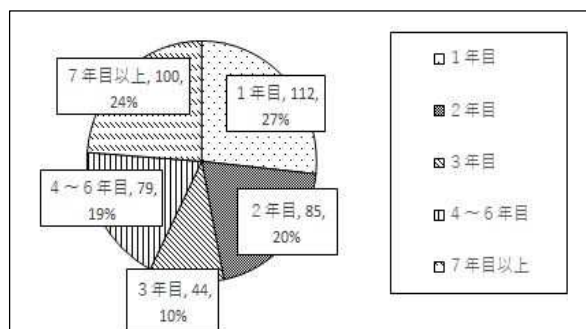


図1 特別支援学級担任の経験年数 (n=420)

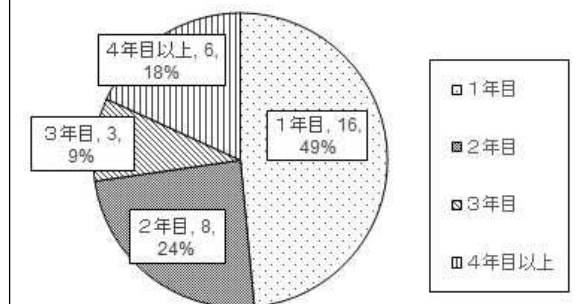


図2 通級指導教室担当の経験年数 (n=33)

大分県教育センター特別支援教育部

導内容の設定」等、種々挙げられ、在籍児童生徒数が多い場合はそれらに加え、「実態把握」や「教育活動全体を通じた指導」、「相談相手がいない」等、多方面に課題や困難を感じていた。

特別支援学級、通級指導教室のいずれにおいても学校教育法施行規則第 138 条、第 140 条により特別の教育課程が編成され、小学校学習指導要領、中学校学習指導要領により自立活動の指導が規定される等、児童生徒一人一人の障がいの状態に応じた指導を行う必要がある。

そこで、本研究では、特別支援学級担任や通級指導教室担当になって 1～3 年目の教員を主な対象として、令和 4・5 年度実態調査で明らかになった担任・担当者の疑問や悩み、課題、困難を基に、自立活動を指導する上での基礎的、基本的な内容で構成した Q & A 形式のハンドブック（以下、Q & A ハンドブックとする）を作成することを目的とする。

II 調査研究の方法

1 Q & A ハンドブックの作成手順

手順	期間	内容
1 Q（疑問） の作成	5 月 ～ 7 月	① 令和 4・5 年度実態調査から特別支援学級担任や通級指導教室担当の自立活動に関する疑問や悩み、課題、困難を集約し、Q を作成する。 ② Q の具体的な内容を、令和 4・5 年度実態調査の自由記述や教育センター実施の特別支援教育関係の研修受講者の発言等から、ピックアップする。 ③ 大分大学の古長治基準教授より、作成した Q やその具体的な内容について、指導助言を受け、修正する。
2 A（回答） の作成	8 月 ～ 11 月	① Q に対する A を、学習指導要領や文献、専門雑誌等を参考に作成する。 ② 作成した Q & A を順次ホームページで試案（以下、Q & A 【試案】とする）として公開し、特別支援学級担任や通級指導教室担当者に提供する。（9 月 27 日より公開） ③ Q & A 【試案】をホームページに公開したことの周知とアンケート（所属・役に立った Q & A ・感想や改善案を記入する、Google フォームで作成）の依頼を、令和 6 年度特別支援学級担当教員研修及び通級指導教室担当教員研修の受講者（125 名）及び令和 4・5 年度実態調査の回答者（442 名）に行う。 ④ Q & A 【試案】に対する感想や改善案を、Google フォームや特別支援教育関連の研修の中で収集する。
3 Q & A 全体 の見直し、 修正	11 月 ～ 12 月	① Q & A を一通り作成した後、改めて全体を見直すと共に、収集した感想や改善案を参考に、新たに Q を追加したり、A の内容を修正したりする。 ② 大分大学の古長治基準教授より、修正した Q & A について、指導助言を受け、更に修正する。

III 調査研究の結果

1 Q（疑問）の作成

令和 4・5 年度実態調査から特別支援学級担任や通級指導教室担当の自立活動に関する疑問や悩み、課題、困難を集約し、Q を作成した。以下に、その例を示す。

小・中学校の特別支援学級及び通級指導教室における自立活動に関する研究

○例 1

【令和4・5年度実態調査の自由記述】

- ・個々の課題や困難さを把握することはできるものの、それをどのように指導するのか判然としません。
- ・1時間の授業の中をどう組み立てるのか、自信がありません。
- ・指導の具体例がたくさんあると参考にしやすいです。具体的な実践例が知りたいです。 等



【作成したQ(疑問)】個々の課題や困難を把握できても、どのように指導するのか、授業をどう組み立てるのか分かりません。

○例 2

【令和4・5年度実態調査の自由記述】

- ・複数人児童がいる時、指導内容が異なる場合、個人別の指導に陥りがちになってしまいます。
- ・個々にあった自立活動をしたいが、複数人いるとどうしても一斉の指導になり、それが実態と合っているのか分からず困っています。
- ・複数生徒がいる時、一人で指導すると、個別指導ができません。 等



【作成したQ(疑問)】児童生徒が複数いる時、どのように指導するのか難しいです。異学年で、発達段階も違う、障がい名も様々です。

2 Q&A【試案】のホームページでの公開と収集した感想

2-1 ホームページのアクセス数

9月27日にQ1～Q5を公開し、以降10月下旬にかけてQ29まで順次公開した。Q&A【試案】のホームページへのアクセス数を表3に示した。10月には284件のアクセスを記録するなど、多くのアクセスをいただいた。

表3 ホームページのアクセス数

月	アクセス数
10月	284
11月	148
12月	193

大分県企画振興部広報広聴課公聴資料より

2-2 収集した感想

20名よりアンケートに回答があった。概ね肯定的な感想が多く、以下のようなものが寄せられた。ICTを活用した実践や教育課程上の授業時数の位置づけ等について要望があったため、Q&Aハンドブックの加筆修正を行った。

【Q&A【試案】のアンケートの感想(一部抜粋)】

- ・子どもが、できること、もう少しできそうなこと、援助があればできること、できないことに分けて整理して何を指導するか決めようと思いました。漫画もあって分かりやすかったです。
- ・特別支援学級を担当して、数年経ちますが、まだまだ自立活動については、「これで良いのかな？」と日々感じながら、悩みながらやっている中で、このようなQ&Aハンドブックは、大変ありがたいです。特に、どのページにおいても、Qとして挙げられている困りが具体的に挙げられており、共感できるものばかりでした。それに対してのAも詳しく書かれていたので、初めて担当する方も、私のように数年担当している方も、困りや疑問点を解決するのに、とても役立つハンドブックになると思いました。
- ・とても分かりやすいものでした。仕事で悩んだ際に、何度も読み直したいと思いました。ありがとうございました。
- ・日頃からどうしたらよいか悩んでいる内容を、とても分かりやすく解説されていてありがたいです。
- ・ICTを活用した特別支援教育や感情スキルコントロールの実践等(をもっと知りたい)。
- ・自立活動のQ&Aが大変参考になりました。前回の研修で勉強させていただいた自立活動の教育課程の位置付けの例が表としてあると分かりやすいと思いました。 等

3 作成したQ&Aハンドブックの特徴


作成した「特別支援学級・通級指導教室 自立活動Q&Aハンドブック」を別紙に示した。このQ&Aハンドブックの特徴として、以下の①～⑥が挙げられる。

- ① 対象は、小・中学校の特別支援学級や通級指導教室を担任・担当して1～3年目の教員を想定。
- ② 内容は基礎的、基本的なものとし、短時間でも読めるように簡潔に記述。
- ③ 読みやすいように、表紙ページから両面印刷すると、Q&Aを見開きで読むことができる。

④ Q (疑問) は、令和4・5年度実態調査の回答や特別支援教育関係の研修の受講者の生の声を基に作成。


⑤ A (回答) は、「1文にまとめたもの」と、「解説」、「まとめや補足」の3つで構成。回答の核心を「1文にまとめたもの」で表わし、「解説」は簡潔に、さらに要点を赤字で表記。

Q1 自立活動とは何ですか。



特別支援学級担任

特別支援学級や通級指導教室では、自立活動の指導をしないといけないですよね……



通級指導教室担当

教科書がないし、具体的な指導のイメージがわかりにくい……



特別支援学級担任

自立活動がなんたるかもよく分からないままスタートし、混乱しています。

1文にまとめたもの
A 個々の障がいによる学習上又は生活上の困難を改善・克服するための指導です。

解説
自立活動の目標は、「個々の児童又は生徒が自立を目指し、障害による学習上又は生活上の困難を主体的に改善・克服するために必要な知識、技能、態度及び習慣を養い、もって心身の調和的発達の基盤を培う」と特別支援学校小学部・中学部学習指導要領に示されています。

特別支援学級では「障害による学習上又は生活上の困難を克服し自立を促すため、特別支援学校小学部・中学部学習指導要領第7章に示す自立活動を取り入れること」、通級による指導では「特別支援学校小学部・中学部学習指導要領第7章に示す自立活動の内容を参考とし、具体的な目標や内容を定め、指導を行うもの」と、小学校学習指導要領及び中学校学習指導要領で規定されています。

自立活動の時間における指導はもとより、学校の教育活動全体を通じて適切に行うものとされており、障がいのある児童生徒にとって、各教科、特別の教科道徳、特別活動等と並ぶ、重要な指導の一つとなっています。

障がいのある児童生徒の発達段階や障がいの状態、特性は一人一人異なり、学習上又は生活上の困難の内容や程度もそれぞれです。よって、自立活動は、一人一人の実態を的確に把握し、個別の指導計画を作成して指導します。また、自立活動の指導は、個別指導の形態で行われることが多く、最初から集団で指導することを前提としたものではありません。

まとめや補足
「どうな授業なのか、まず、イメージしてみましょう。自立活動の実践事例が、大分県教育センターのホームページ上にありますので、ご覧ください。」

大分県教育センター「特別支援教育 実践事例」

- 5 -
⇒目次へ
- 6 -
⇒目次へ

- ⑥ タブレット端末やパソコン等にダウンロードして閲覧する場合、インターネットに接続された環境であれば、タップやクリックで該当ページやサイトに飛ぶことができるように、文字にリンクを張った。

IV 成果と課題

Q&Aハンドブックの作成を通して、自立活動における流れ図を参考にした目標・内容の設定、授業の構想、評価、教職員や保護者の連携等に関して、基本的な考え方や具体的な手順等を整理するこ

小・中学校の特別支援学級及び通級指導教室における自立活動に関する研究

とができた。また、試案としてホームページに公開したことで、いち早く特別支援学級担任や通級指導教室担当に情報を提供し、好評を博すことができた。また、寄せられたアンケートの感想等を基に、ブラッシュアップしたQ&Aハンドブックにすることができた。

課題としては、本センターの研修でQ&Aハンドブックを活用すること、また、学習指導要領の改訂や法令の改正、時代の変化等に合わせ内容を適宜修正していくことである。そして、特別支援学級担任や通級指導教室担当の自立活動に関する専門性が向上し、自立活動が適切かつ効果的に指導されていくことを願っている。

V 引用・参考文献

- 文部科学省 2018 特別支援学校教育要領・学習指導要領解説自立活動編（幼稚部・小学部・中学部）
文部科学省 2024 特別支援教育No.95 令和6年秋
青森県総合学校教育センター特別支援教育課 2022 時々サクッと読み返したくなる！特別支援学級・通級指導教室の授業づくりに役立つQ&A
島根県教育センター 2021 自立活動ってなんだろう？
岡山県総合教育センター 2019 自立活動ハンドブックー知的障害のある児童生徒の指導のためにーVer.2
愛媛県総合教育センター特別支援教育室 2019 特別支援学級における自立活動ガイドブック
沖縄県総合教育センター特別支援教育班 2022 自立活動ハンドブック
菊地一文 2022 確かな力が育つ知的障害教育「自立活動」Q&A 東洋館出版社
大分県教育センター 2023 小・中学校通級指導教室における指導の実態と課題に関する調査研究
大分県教育センター 2024 小・中学校の特別支援学級及び通級指導教室における自立活動に関する研究（1年次／2年）ー特別支援学級の自立活動に関する実態調査及び好事例の集積ー

「チーム学校」における支援体制づくりに関する調査研究（1年次/2年）

－教育相談コーディネーターを核とした専門スタッフ等の活用を通して－

大分県教育センター教育相談部
指導主事 後藤 由美

I 研究の背景

「令和5年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査」（文部科学省）では、国立、公立、私立の小・中・高・特別支援学校におけるいじめの認知件数や不登校児童生徒数等、それぞれ過去最多となる結果が明らかになっており、本県でも大きな課題となっている。令和4年12月に改訂された生徒指導提要において、「チーム学校による生徒指導体制」が柱となり、学校組織に心理や福祉等の専門スタッフを位置づけ、教員と専門スタッフとの連携・協働の体制を充実させることがより一層重要視されるようになってきている。大分県教育委員会でも、令和7年2月時点の「大分県長期教育計画（案）」により、複雑・困難化する学校の教育課題の解決に向けて、専門人材や関係機関と連携した「チーム学校」による組織的な取組が機能することを目指している。

II 現状と課題

大分県教育委員会は、スクールカウンセラー（以下 SC）を平成30年度に全公立小中学校に、令和元年度に県立高等学校及び県立特別支援学校に配置、スクールソーシャルワーカー（以下 SSW）を平成30年度に公立全中学校区、県立学校に配置した。更には、平成30年度より SC、SSW等の専門スタッフとの連絡調整役として「教育相談コーディネーター」を校務分掌に位置づけるとともに、地域児童生徒支援コーディネーターを配置し、学校における専門スタッフを活用した教育相談体制の充実を推進してきた。県教育センター教育相談部では、平成31年3月に「教育相談体制充実のためのガイド～組織的でより効果的な教育相談のために～」を発行し、全公立学校へ配布し、教育相談コーディネーターを中心とした教育相談体制の充実を後押ししてきた。

SC等が各学校に配置され5年以上が経過し、校内の教育相談体制は確かに構築されつつあるが、令和4年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査によると、不登校児童生徒のうち、専門的な相談・指導を受けていない児童生徒の割合は、小学校18.4%、中学校32.8%であり、支援が十分に行き届いているとはいえない。教育相談体制のより一層の充実に向けて、学校の教育相談体制の現状や具体的な困り、課題を明らかにする必要がある。また、令和5年度大分県いじめ・不登校等調査（1学期）によると、ケース会議への専門スタッフの参加についても、専門スタッフが全く参加していない学校が小学校20%、中学校6%、高等学校32%見られることから、ケース会議等の持ち方や時間の設定、内容、資料準備等の課題について明らかにする必要がある。

そこで本調査研究では、教育相談体制の現状と課題、教育相談体制を構築する上で各学校が必要としていることを明確にし、専門スタッフの活用、効果的なケース会議の持ち方を検討することを目的とする。

III 調査・研究の内容

1 教育相談担当者等へのアンケート調査による実態把握

1-1 調査方法及び対象

大分市を除く全市町村と県立の小・中・義務教育学校283校及び全県立高等学校・特別支援学校61校の教育相談担当者を対象に、オンライン（Google Forms）によるアンケート調査を実施した。

1-2 調査内容【詳細は別添資料1-1参照】

- ・教育相談担当や教育相談コーディネーターの経験年数、教員としての経験年数等
- ・校内の教育相談体制の現状や教育相談をすすめる上で困難なこと、必要なこと、ガイドに必要な内容等
- ・令和5年度のケース会議の開催やSC、SSWの参加の有無、参加していない理由
- ・ケース会議後のその後の取組がうまくいったケースの会議の回数や頻度、会議で特に役割を果たした人、取組がうまくいった要因等
- ・短時間で行う会議について認識の有無

1-3 分析について

分析については、指導助言者である大分大学教育学部教授藤田敦氏に協力依頼し、平均値分析や相関分析を行った。

2 短時間で行う効果的な会議についての研究

立正大学心理学部臨床心理学科教授鹿嶋真弓氏等が提唱している「ブリーフミーティング（以下BM）」に着目し、研究をすすめた。BMは、会議の流れや時間が明確で構造化されており、実際に会議にかかる時間は30分である。事前の資料準備は必要なく、事例報告や参加者の発言の内容がホワイトボードに視覚化される。また、ブリーフセラピー*1の考え方をベースに取り入れることで、解決志向で意見を出し合い、具体的な対応策にたどり着くことができる会議である。そのため、多忙な学校現場の実態からも有効な会議の手法ではないかと考えた。教育相談部内で、進行、事例提供、記録、参加者の役を設定し、過去や架空の事例をもとに、実際にBMを実施し、疑問や意見を出し合い、会議運営のポイントや留意すべき点など、学校現場でより実施しやすい会議の方法を検討した。

IV 調査・研究の結果

1 教育相談担当者等へのアンケート調査の分析結果

小・中・義務教育学校 236/283校、高等学校・特別支援学校 61/61校から回答があり、回収率は86%であった。

1-1 教育相談体制の現状について

「いじめ・不登校等の課題に対して、チームとしての教育相談体制は機能していますか」という問いに対しては、ほぼ全ての学校が「十分機能している」「ある程度機能している」と回答した【別添資料1-2】。また、いじめ・不登校等の課題に対する教育相談体制の現状として当てはまるものとして、約9割の学校が「管理職に相談しやすい雰囲気がある」「教職員に相談しやすい雰囲気がある」「児童生徒の情報交換を行う機会がある」「SC、SSWと連携している」「養護教諭と連携している」を挙げている。一方、「教育相談担当や教育相談コーディネーターとの連携」について課題がある校種があることも分かった【別添資料1-3】。

1-2 教育相談をすすめる上で困難なこと

いじめ・不登校等の課題に対する教育相談をすすめるときに、【表1】の項目について、どのくらい困難であるか4件法で質問したところ、「管理職や教職員の理解や協力を得ること」以外は、困難であると感じていることが分かった。特

表1 教育相談をすすめるときに困難なこと

	有効N	平均値	標準偏差
困難(家庭の問題等が複雑)	297	3.542	0.662
困難(専門的知識や技能が必要)	297	3.229	0.633
困難(管理職や教職員の理解や協力)	297	2.374	1.023
困難(日程の調整や時間を確保)	297	2.919	0.801
困難(SCやSSWとの連絡調整)	297	2.549	0.888
困難(外部機関との連絡調整)	297	2.758	0.843
困難(体制や運営のための計画)	297	2.865	0.750

平均値が4に近いほど高い

*1 精神科医ミルトン・ハイランド・エリクソン博士の臨床実践に何らかの影響を受けて発展した短期療法の総称。基本的な考え方として、「変化を起こすこと」「原因にこだわらない」「ユーティライゼーション」などがある。

に、「家庭の問題等が複雑であること」「専門的知識や技能が必要であること」は平均値も 3.0 以上と高く、より困難と捉えていることが分かった。これは、教育相談コーディネーターの経験年数別で見ても、経験年数が長い教育相談コーディネーターほど困難さを感じていることが分かった。一方、経験が浅い教育相談コーディネーターは体制や運営のための計画を立てることにもより困難さを感じていることが分かった【別添資料 1-4】。

1-3 教育相談体制が機能するために必要なこと

いじめ・不登校等の課題に対するチームとしての教育相談体制が機能するために、【表 2】の項目について、どのくらい必要と感じているか 4 件法で質問した。全ての項目が高い割合で必要であると認識されていることが分かった。

表 2 教育相談体制が機能するために必要なこと

	有効N	平均値	標準偏差
必要(管理職の理解・協力)	297	3.963	0.206
必要(教職員の理解・協力)	297	3.960	0.197
必要(ケース会議の時間)	297	3.805	0.406
必要(ガイド・手引き)	297	3.290	0.719

平均値が 4 に近いほど高い

た。更に、「ガイド（手引き）等が作成されていること」が必要だと回答し

た学校にガイド（手引き）を活用するために必要な内容についてチェックしてもらったところ【別添資料 1-5】、「教育相談の流れ」、「ケース会議の持ち方」「SC、SSW、SL との連携の仕方」「外部関係機関との連携の仕方」が特に高い割合を示していた。また、IV-1-1 との相関関係を見ると、「教育相談担当や教育相談コーディネーターと連携している」と答えた学校は、養護教諭、SC・SSW、外部の関係機関とも連携していると回答した学校が多く、更にガイド（手引き）に必要な内容として、「連携の仕方」を求めていることが分かった。そして、IV-1-2 との相関関係を見ると、「専門的知識や技能が必要であること」が困難と感じている学校は、ガイド（手引き）が必要だと感じていることが分かった【別添資料 1-6】。

1-4 令和 5 年度のケース会議の開催について

いじめ・不登校等についてのケース会議の開催について、開催の有無について質問したところ、約 9 割の学校が開催していることが分かった【別添資料 1-7】。「開催した」と回答した学校に、SC・SSW の参加について質問したところ、「参加していない」と回答した学校は、SC も SSW もともに 25% 程度であり、その理由については「日程・時間が合わない」が最も高かった。また、「活用方法がわからない」と回答した学校が数校あることが分かった【別添資料 1-8~11】。

1-5 その後の取組がうまくいったケースについて

IV-1-4 でケース会議を「開催した」と回答した学校に、「その後の取組」がうまくいったケースを一つ思い浮かべてもらい、そのケース会議の回数や頻度、会議で特に役割を果たした人、取組がうまくいった要因について質問した。ケース会議の回数については、「4 回以上」が最も高く、会議を積み重ね解決を目指したことが分かった。ケース会議の頻度については、「必要に応じて不定期」が最も高かった【別添資料 1-12】。また、会議で特に役割を果たした人については、担任が最も高く、次いで管理職、教育相談コーディネーターであった【別添資料 1-13】。取組がうまくいった要因については、「関係者がそれぞれの役割を果たすことができたこと」「ケース会議の内容を活かした支援ができたこと」が特に高い割合を示していた【別添資料 1-14】。

2 短時間で行う効果的な会議についての研究の結果

6 月より月に 1 回の BM 検討会を全 8 回実施し、検討を重ねた。毎回の振り返りでは、「参加者に様々な対応策を出してもらおうと、次の一手が見つかり『やってみよう』と思える」「同じ記録を全員で見て考えることができ、意見を出すことに集中できる」などの優れた点についての意見もあったが、「ゴール設定を具体的にしないと対応策を出しにくい」などの難しさもあった。そのため、場面別 BM ワンポイントシート【別紙資料 2】を作成し、後半の検討会では会の始めにポイントや留意点を確認してから BM を実施することにした。回数を重ねることで、参加者が原因にこだわるのではなく「どうすればうまくいくか」と解決に着目するようになり、より円滑に BM を実施できるようになった。

V 考察

1 教育相談担当者等へのアンケート調査の分析結果についての考察

いじめ・不登校等の課題に対する教育相談をすすめる際、問題が複雑化し専門的な知識や技能が必要と感じていることから、学校関係者だけではなく専門スタッフを活用し、「チーム学校」で支援していくことが必要だと考えられる。また、そのために専門スタッフの調整役として教育相談コーディネーターが機能していくことが必須であり、ガイド（手引き）が求められている。ガイド（手引き）の内容は「教育相談の流れ」、「ケース会議の持ち方」「SC、SSW、SL との連携の仕方」などの専門的な知識を含めた具体的なすすめ方が記載されていることが求められている。ガイド（手引き）の作成により、教育相談の質が向上し、いじめや不登校の問題に対する効果的な対応が可能となると考える。

ケース会議については、より複雑化するケースに対応するためにも専門スタッフの参加が望まれる。また、日程調整や時間の確保が難しい多忙な学校現場では、より短時間で行える会議が望ましいと考える。そして、ケース会議後の取組がうまくいくために、会議は単発で終わるのではなく継続的に開催し、参加者の役割や支援内容・対応策を明確にすることが求められる。これにより、問題解決に向けた取組が一貫して進められ、効果的な支援が提供されることが期待される。

2 短時間で行う効果的な会議についての研究の考察

BM は、話し合いにおける参加者の思考プロセスを視覚化した会議であり、「30分という短時間で行える」「事前の資料準備がいらぬ」という手軽さがありながらも、時間内に具体的な対応策を導き出せる利点がある。そのため、V-1で明らかになった点も踏まえると、多忙な学校現場で有効であり、教員が一人で抱え込まず、「チーム学校」による組織的な教育相談体制の推進の一助を担っていく取組になるのではないかと考える。しかしながら、実際に研究をすすめる中で、参加者が解決志向であることやBMの理論等について理解していること、進行役の力量が必要であることが分かった。今後は、作成した「場面別BMワンポイントシート」が学校現場で実際に活用できるかや、BMの効果について、検証していく必要がある。

3 まとめ

1年次である本調査研究では、アンケートの分析結果より各学校の教育相談体制の現状と課題や教育相談体制を充実させるために各学校が必要としていることを明らかにすることができた。そして、その課題の一つであるケース会議について、「短時間で具体的な対応策を導き出せる」BMの手法が有効であること確認し、「場面別BMワンポイントシート」の試案を作ることができた。次年度は、BMの検証を行うとともに、本研究で得た成果をもとに「教育相談充実のためのガイド改訂版（試案）」を作成し、組織的でより効果的な校内教育相談体制の充実に繋がるよう役立てたい。

VI 参考文献等

- ・「令和4年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査」（2023 文部科学省）
- ・「令和5年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査」（2024 文部科学省）
- ・「生徒指導提要令和4年12月改訂」（2023 文部科学省）
- ・「大分県長期教育計画（案）」（大分県教育委員会）
- ・「令和5年度大分県いじめ・不登校等調査」（2024 大分県教育委員会学校安全・安心支援課）
- ・清水裕士（2016）「フリーの統計分析ソフト HAD：機能の紹介と統計学習・教育，研究実践における利用方法の提案」メディア・情報・コミュニケーション研究, 1, 59-73.
- ・鹿嶋真弓・石黒康夫・吉本恭子（2022）「30分で会議が終わる！職員室に変化を起こすブリーフミーティング」学事出版株式会社
- ・大分県教育センター教育相談部（2019）「平成29・30年度『チーム学校』における教育相談体制の充実に関する調査研究」

別添資料1 教育相談主任・教育相談コーディネーターアンケート調査及び回答結果
【1. 質問項目】

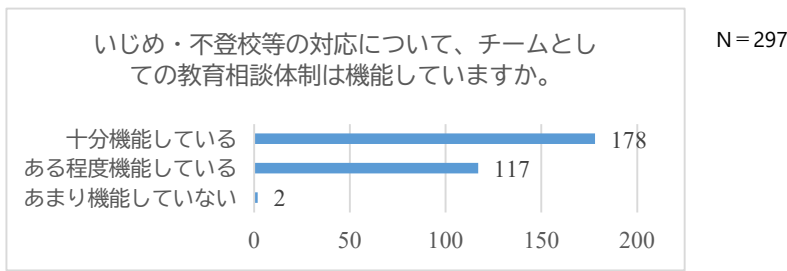
- (1) - 1 教育相談担当や教育相談コーディネーターの経験年数、教員としての経験年数
- (1) - 2 教育相談担当や教育相談コーディネーター以外で兼務している業務
- (2) - 1 いじめ・不登校の対応について、チームとして教育相談体制は機能しているか（4件法）
- (2) - 2 教育相談体制の現状としてあてはまるものすべてにチェック
- ・管理職に相談しやすい雰囲気がある
 - ・教職員間に相談しやすい雰囲気がある
 - ・児童生徒の情報交換を行う機会がある
 - ・教育相談担当や教育相談コーディネーターと連携している
 - ・養護教諭と連携している
 - ・SC、SSW と連携している
 - ・外部の関係機関と連携している
 - ・教育相談に係る校内研修の機会がある
- (2) - 3 いじめ・不登校等の課題に対する教育相談をすすめるときに以下のことがどのくらい困難と感じるか（4件法）
- ①家庭の問題等が複雑であること
 - ②専門的知識や技能が必要であること
 - ③管理職や教職員の理解や協力を得ること
 - ④日程の調整や時間を確保すること
 - ⑤SC や SSW との連絡調整をすること
 - ⑥外部機関との連絡調整をすること
 - ⑦体制や運営のための計画を立てること
- (2) - 4 いじめ・不登校等の課題に対して、チームとしての教育相談体制が機能するために、以下のことがどのくらい必要とを感じるか（4件法）
- ①管理職の理解・協力があること
 - ②教職員の理解・協力があること
 - ③ケース会議等を行う時間を確保すること
 - ④教育相談コーディネーターの役割やケース会議の持ち方についてのガイド（手引き）等が作成されていること
- (2) - 5 (2) - 4④で、ガイド（手引き）が必要であると答えた方は、どんな内容があるとガイドを活用できるか。（複数回答可）
- ・教育相談組織図
 - ・教育相談の流れ
 - ・校内での役割分担
 - ・ケース会議の持ち方
 - ・ケース会議のメンバー
 - ・会議の内容
 - ・事例やコラム
 - ・SC、SSW、SL との連携の仕方
 - ・外部関係機関との連携の仕方
 - ・相談支援シート等の様式やモデル
 - ・その他
- (3) - 1 令和5年度、いじめ・不登校の課題について、ケース会議を開催したか。
- (3) - 2 令和5年度実施したケース会議について、SCは参加したか。
- (3) - 3 (3) - 2「参加していない」を回答した場合、その理由を一つチェック
- ・日程・時間が合わない
 - ・調整をする時間的余裕がない
 - ・活用方法がわからない
 - ・その他

『チーム学校』における支援体制づくりに関する調査研究

- (3) - 4 令和5年度実施したケース会議について、SSWは参加したか。
- (3) - 5 (3) - 4で参加していない」を回答した場合、その理由を一つチェック
- ・日程・時間が合わない
 - ・調整をする時間的余裕がない
 - ・活用方法がわからない
 - ・その他
- (3) - 6 令和5年度ケース会議を開催したケースで、「その後の取組」がうまくいったケースを一つ思い浮かべ、以下の問いに答えてください。
- ①「その後の取組」は、どの程度うまくいったと感じたか。
- ②そのケースは何についてだったか。一つチェック
- ・いじめ ・不登校 ・その他
- ③そのケース会議の参加者
- ④そのケース会議や「その後の取組」の中で特に役割を果たした人
- ⑤そのケース会議の実施回数を一つチェック
- ・1回 ・2回 ・3回 ・4回以上
- ⑥そのケース会議の頻度を一つチェック
- ・週に1回 ・月に1回 ・学期に1回 ・年に1回 ・必要に応じて不定期 ・その他
- ⑦「その後の取組」がうまくいったのは、何がよかったからだと思うか。当てはまるものを最大3つまでチェック
- ・必要に応じてケース会議を開催できたこと
 - ・関係者がそれぞれの役割を果たすことができたこと
 - ・SC、SSW、SLからの助言があったこと
 - ・SC、SSW、SL以外からの助言があったこと
 - ・早期に対応ができたこと
 - ・その他
- ⑧(3) - 1で「開催していない」と回答した場合の理由をチェック
- ・日程・時間調整が困難 ・参加予定者全員の参加が難しい ・職員間の温度差がある
 - ・運営方法が分からない ・資料作成や会議を実施する時間的余裕がない
 - ・会議では解決できない ・その他
- (4) - 1 いじめ・不登校の課題について、学校外の関係機関と連携したか。
- ・密に連携した ・必要に応じて連携した ・必要だったが連携できなかった ・全く連携しなかった
- (4) - 2 (4) - 1で「連携した」と回答した場合、連絡調整した担当者
- (5) - 1 短時間で解決志向で行う会議を知っているか。
- (5) - 2 (5) - 1で「知っている」と回答した場合、校内で実施したことはあるか。

『チーム学校』における支援体制づくりに関する調査研究

【2. チームとしての教育相談体制の回答結果】



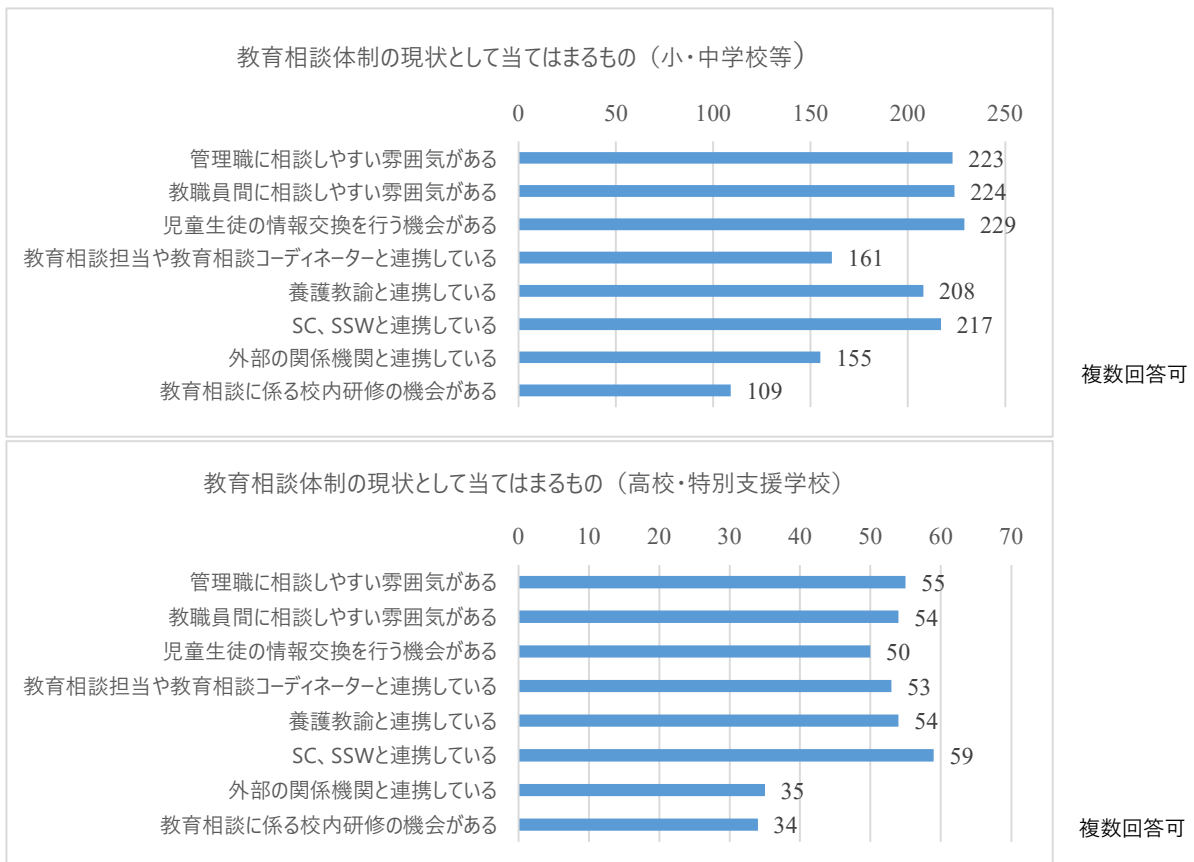
【3. いじめ・不登校等対応の教育相談体制の現状の回答結果】

《全体》

	有効N	平均値	標準偏差
管理職に相談しやすい雰囲気がある	297	0.936	0.245
教職員間に相談しやすい雰囲気がある	297	0.936	0.245
児童生徒の情報交換を行う機会がある	297	0.939	0.239
教育相談担当や教育相談コーディネーターと連携している	297	0.721	0.449
養護教諭と連携している	297	0.882	0.323
SC、SSWと連携している	297	0.929	0.257
外部の関係機関と連携している	297	0.640	0.481
教育相談に係る校内研修の機会がある	297	0.481	0.501

平均値が1に近いほど高い

《小・中学校等と高校・特別支援学校の別》



『チーム学校』における支援体制づくりに関する調査研究

【4. 教育相談をすすめる時に、困難と感じることの回答結果】

≪経験年数別≫

	経験年数	平均値	標準偏差		
困難(家庭の問題等が複雑)	通算経験年数=1	3.492	0.707	1年未満	130
	通算経験年数=2	3.590	0.606	1~2年	83
	通算経験年数=3	3.557	0.620	3~5年	61
	通算経験年数=4	3.609	0.722	6年以上	23
困難(専門的知識や技能が必要)	通算経験年数=1	3.246	0.648		
	通算経験年数=2	3.145	0.587		
	通算経験年数=3	3.230	0.643		
	通算経験年数=4	3.435	0.662		
困難(管理職や教職員の理解や協力)	通算経験年数=1	2.338	0.985		
	通算経験年数=2	2.361	1.077		
	通算経験年数=3	2.541	1.026		
	通算経験年数=4	2.174	1.029		
困難(日程の調整や時間を確保)	通算経験年数=1	2.838	0.833		
	通算経験年数=2	2.976	0.749		
	通算経験年数=3	3.016	0.764		
	通算経験年数=4	2.913	0.900		
困難(SCやSSWとの連絡調整)	通算経験年数=1	2.585	0.896		
	通算経験年数=2	2.494	0.889		
	通算経験年数=3	2.590	0.864		
	通算経験年数=4	2.435	0.945		
困難(外部機関との連絡調整)	通算経験年数=1	2.769	0.859		
	通算経験年数=2	2.783	0.856		
	通算経験年数=3	2.803	0.792		
	通算経験年数=4	2.478	0.846		
困難(体制や運営のための計画)	通算経験年数=1	2.900	0.766		
	通算経験年数=2	2.867	0.729		
	通算経験年数=3	2.836	0.734		
	通算経験年数=4	2.739	0.810		

平均値が4に近いほど高い

【5. ガイド(手引き)を活用とするために必要な内容の回答結果】

	度数	確率(%)	
G教育相談組織図	95	31.99	
G教育相談の流れ	190	63.97	
G校内での役割分担	150	50.51	
Gケース会議の持ち方	201	67.68	
Gケース会議のメンバー	103	34.68	
G会議の内容	123	41.41	
G事例やコラム	104	35.02	
GSC,SSW,SLとの連携の仕方	162	54.55	
G外部関係機関との連携の仕方	165	55.56	複数回答可
G相談支援シート等の様式やモデル	150	50.51	

『チーム学校』における支援体制づくりに関する調査研究

【6. 各質問項目の相関関係】※一部抜粋

	教育相談担当 や教育相談 コーディネー ターと連携し ている	養護教諭 と連携し ている	SCSSW と連携し ている	外部の関 係機関と 連携して いる	困難(家 庭の問題 等が複雑)	困難(専 門的知識 や技能が 必要)
教育相談担当や教育相談コーディネーターと連携している	1.000					
養護教諭と連携している	.377 **	1.000				
SCSSWと連携している	.179 **	.184 **	1.000			
外部の関係機関と連携している	.252 **	.291 **	.203 **	1.000		
困難(家庭の問題等が複雑)	.113 +	.110 +	.226 **	.127 +	1.000	
困難(専門的知識や技能が必要)	.012	.050	.017	.017	.283 **	1.000
困難(管理職や教職員の理解や協力)	-.140 +	-.071	.050	-.089	.179 **	.348 **
困難(日程の調整や時間を確保)	.059	-.024	.103 +	.082	.299 **	.417 **
困難(SCやSSWとの連絡調整)	-.046	-.009	-.051	-.018	.188 **	.365 **
困難(外部機関との連絡調整)	-.081	-.043	.045	-.016	.230 **	.396 **
困難(体制や運営のための計画)	-.052	-.010	.056	-.013	.216 **	.421 **
必要(管理職の理解・協力)	.107 +	.036	.014	.001	.073	.013
必要(教職員の理解・協力)	.139 +	.084	-.057	.060	.013	.047
必要(ケース会議の時間)	.089	.107 +	-.036	.071	.068	.188 **
必要(ガイド・手引き)	.021	.104 +	.038	.088	.052	.277 **
G教育相談組織図	.073	.049	-.048	.049	.027	.174 **
G教育相談の流れ	.017	.096	-.015	.050	.000	.139 +
G校内での役割分担	.089	.077	-.010	.113 +	.068	.210 **
Gケース会議の持ち方	.035	.105 +	-.022	.036	.033	.194 **
Gケース会議のメンバー	.123 +	.135 +	.091	.105 +	.077	.083
G会議の内容	.097 +	.116 +	.152 **	.090	.086	.182 **
G事例やコラム	.048	.049	.065	.066	.103 +	.214 **
GSCSSWSLとの連携の仕方	.185 **	.065	.065	.076	.094	.245 **
G外部関係機関との連携の仕方	.153 **	.093	.097 +	.091	.098 +	.206 **

** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

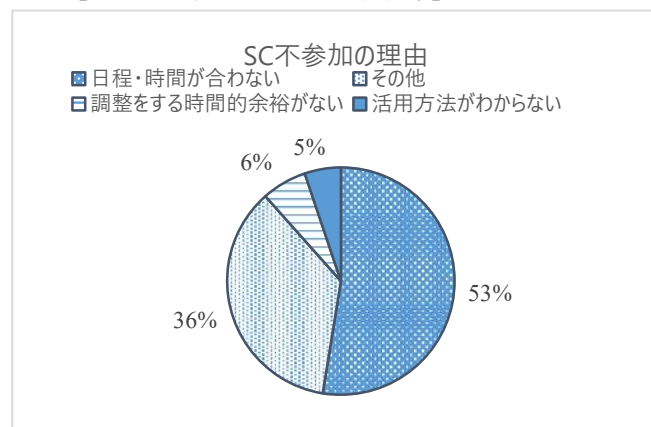
【7. R5 いじめ・不登校等の対応についてのケース会議の開催の回答結果】

	度数	確率(%)	N = 297
開催した	262	88.22	
開催しなかった	35	11.78	

【8. ケース会議へのSCの参加の回答結果】

	度数	確率(%)	N = 297
毎回参加した	54	18.18	
時々参加した	134	45.12	
参加していない	74	24.92	
開催していない	35	11.78	

【9. SC不参加の理由の回答結果】



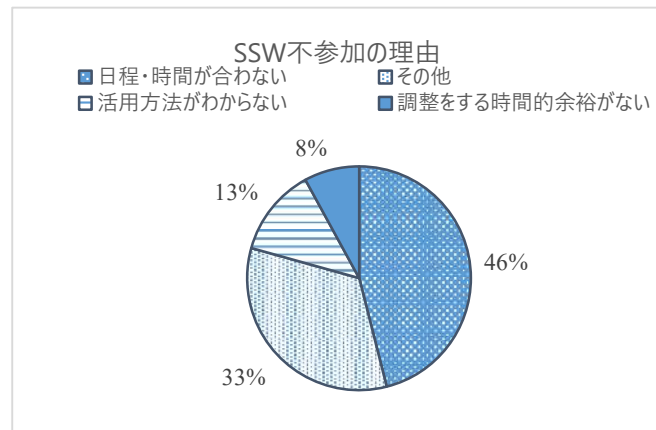
『チーム学校』における支援体制づくりに関する調査研究

【10. ケース会議へのSSWの参加の回答結果】

	度数	確率(%)
毎回参加	47	15.82
時々参加した	147	49.49
参加していない	68	22.90
開催していない	35	11.78

N = 297

【11. SSW不参加の理由の回答結果】



【12. ケース会議後の取組がうまくいった事例について、会議の回数と頻度の回答結果】

	度数	確率(%)
1回	38	12.79
2回	69	23.23
3回	70	23.57
4回以上	85	28.62
開催していない	35	11.78

N = 297

	度数	確率(%)
週に1回	13	4.38
月に1回	56	18.86
学期に1回	68	22.90
年に1回	5	1.68
必要に応じて不定期	113	38.05
その他	7	2.36
開催していない	35	11.78

N = 297

【13. ケース会議後の取組がうまくいった事例について、会議で特に役割を果たした人の回答結果】

	有効N	平均値	標準偏差
校長	297	0.397	0.490
副校長	297	0.007	0.082
教頭	297	0.300	0.459
教務主任	297	0.077	0.268
教育相談担当	297	0.064	0.245
生徒(生活)指導担当	297	0.010	0.100
教育相談コーディネーター	297	0.380	0.486
特別支援教育コーディネーター	297	0.077	0.268
学部主事	297	0.013	0.115
学年主任	297	0.178	0.384
担任	297	0.599	0.491
養護教諭	297	0.286	0.453
SC	297	0.199	0.400
SSW	297	0.296	0.457
SL	297	0.000	0.000
教育委員会	297	0.064	0.245
医療関係者	297	0.010	0.100
福祉関係者	297	0.114	0.319
警察関係者	297	0.000	0.000
行政関係者	297	0.051	0.219
児童生徒本人	297	0.000	0.000
保護者	297	0.064	0.245

複数回答可
平均値が1に近いほど高い

【14. ケース会議後の取組がうまくいった事例について、うまくいった要因の回答結果】

	度数	確率(%)
必要に応じてケース会議を開催できたこと	134	45.12
関係者がそれぞれの役割を果たすことができたこと	151	50.84
SC、SSW、SLからの助言があったこと	104	35.02
SC、SSW、SL以外からの助言があったこと	14	4.71
ケース会議の内容を活かした支援ができたこと	162	54.55
早期に対応ができたこと	81	27.27

当てはまるものを最大3つまでチェック

別添資料2

〈場面別 BM ワンポイントシート〉

事例報告 (5分)

- 提** ・事例報告は困っていることから話す
- ・解決のために必要と思われる情報が得られればよいので、深追いしない

リソース探しのための質問 (10分)

- 参** ・質問は解決に役立つリソースを引き出す
- ・発言は短く簡潔に
- ・原因を掘り下げるような質問は NG
- 進** ・事例報告者への批判やあら探しにならないように注意する
- ・時間を守る

ゴール設定 (2分)

- ・「これくらいならできそう」と思えるスモールステップで考える
- 提** ・抽象的ではなく行動が見える具体的なゴールを設定する
- 進** 「どのような場面で、どのようになってほしいのか」具体的に示す
- ・否定形ではなくポジティブな思考につながる肯定形で設定する
- ・1日何回、〇分間など数値化することで行動に移しやすくなる

膠着している状況に少しの変化を起こすためにゴールを設定する

期限までの具体的なゴールを設定する

解決のための対応策 (10分)

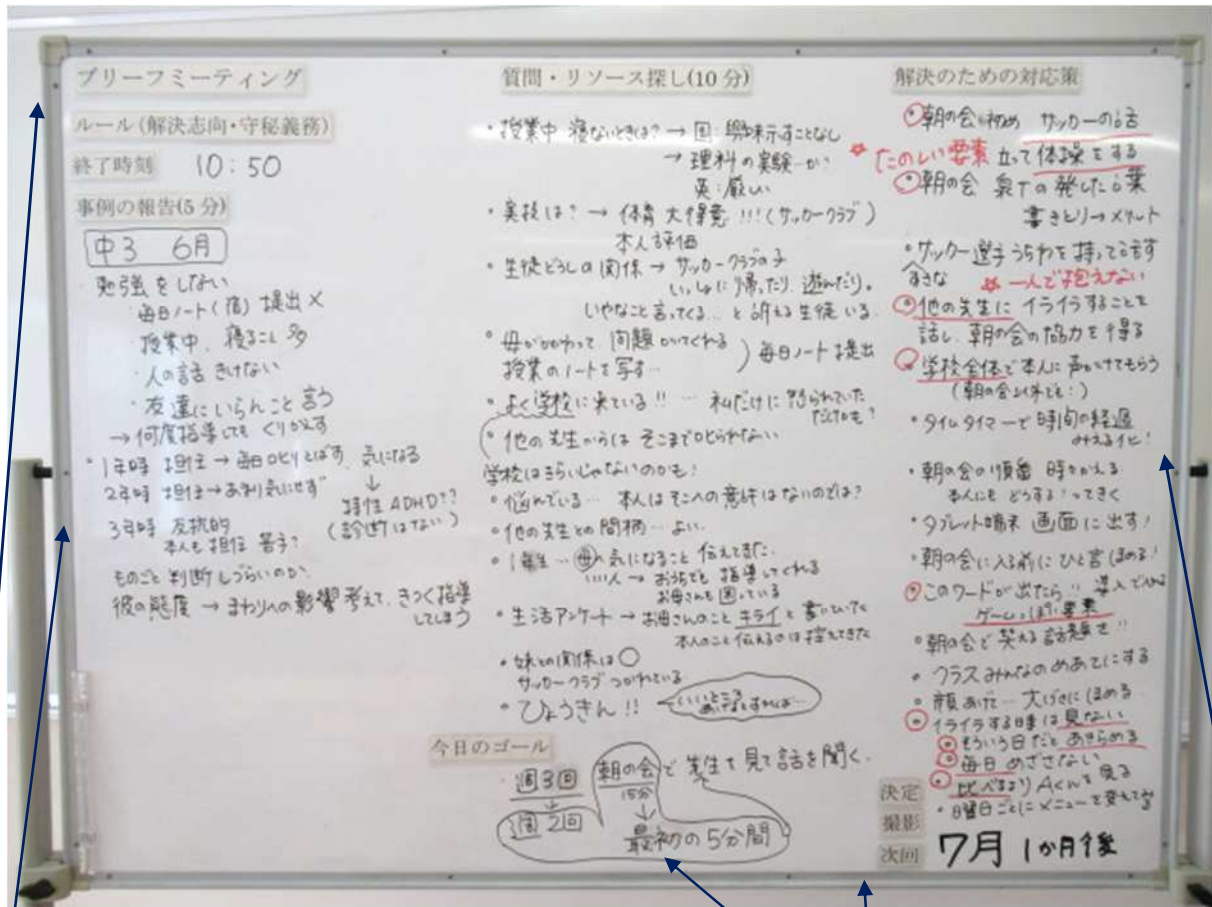
- 参** ・解決策は解決志向のブレインストーミング
- ・「どうすればうまくいくか」の解決志向で
- ・リソースを手がかりに考える
- ・役に立つものは何でも使う
- ・「こんなこと言っても大丈夫？」こそヒントに!
- 進** ・時間を守る

アイデアの善し悪しを判断しない
自由な意見を歓迎
意見の質より量

・進行 **進** ・事例提供者 **提** ・参加者 **参**

『チーム学校』における支援体制づくりに関する調査研究

〈ホワイトボード記載例〉



ルールの確認
○最初にルールと終了時刻を確認する。

事例報告
○事例報告は、困っていることから話す。

ゴール設定
○「どのような場面でどのようなしてほしいのか」具体的なゴールを設定する。

記録
○記録は撮影して終了。メモする必要なし。

解決のための対応策
○ゴールに向けて、解決志向でアイデアをたくさん出し合う。